

石見銀山

Iwami Ginzan Silver Mine Site

— 栃畠谷地区 龍源寺間歩上墓地・妙像寺墓地 —

令和2(2020)年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

序

島根県と大田市は、平成9年から石見銀山遺跡について発掘調査や文献調査など総合的な調査を行っています。こうした調査成果は、平成19年度に、「石見銀山遺跡とその文化的景観」の世界遺産登録として実を結びました。そして、登録後もその歴史的位置づけをより一層明らかにするため、調査を継続しているところです。石造物調査もこの総合調査の一環として当初から取り組んでおり、これまでに銀山400年の歴史の一端を明らかにしてきました。

本書は、平成30年度と令和元年度に実施した、石見銀山遺跡の柄畠谷地区に所在する龍源寺間歩上墓地及び妙像寺墓地における石造物調査の成果を報告するものです。

龍源寺間歩上墓地では16世紀末から19世紀中頃にかけての墓石が多数見つかっています。その中には地蔵のレリーフが彫られた宝篋印塔や墓地の供養のために造立されたと考えられる変形墓標などが発見され、石見銀山遺跡では初めて確認された特異なものとして注目されます。また、妙像寺墓地では日蓮聖人の遠忌報恩のために造立された宝塔が確認されました。これらの調査成果は石見銀山の歴史や信仰のあり方を物語るもので、今後の調査研究の基礎資料となるものです。

最後に、この調査に際して御協力いただきました関係各位に厚くお礼を申し上げますとともに、本書が今後の調査研究のみならず、遺跡の保護や整備活用、さらに歴史学習において広く活用していただければ幸いです。

令和2年3月

島根県教育委員会

教育長 新田英夫

例　　言

1. 本書は、石見銀山遺跡総合調査の一環として実施した石造物調査の報告書である。

2. 調査した場所は以下のとおりである。

　　栢畠谷地区 龍源寺間歩上墓地 大田市大森町ホ329、ホ323、ホ323-3、ホ285外
　　妙像寺墓地 大田市大森町ホ330

3. 調査は次の組織で実施した。

石見銀山遺跡調査専門委員会

井上雅仁（島根県立三瓶自然館学芸課課長）

大橋泰夫（島根大学法文学部教授）

岡美穂子（東京大学史料編纂所准教授）

黒田乃生（筑波大学大学院芸術系教授）

高妻洋成（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長）

田辺征夫（公益財団法人大阪府文化財センター理事長）

津村眞輝子（公益財団法人古代オリエント博物館研究部長）

中西哲也（九州大学総合研究博物館准教授）

仲野義文（石見銀山資料館館長）

原田洋一郎（東京都立産業技術高等専門学校教授）

松村恵司（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所所長）

山村亜希（京都大学大学院准教授）

事務局（島根県教育委員会文化財課）

平成30年度

　　萩 雅人（文化財課長） 山根雅之（世界遺産室長） 今岡一三（同主席研究員）

　　守岡利栄（同専門研究員） 伊藤徳広（同企画員） 桑垣正樹（同企画員）

　　伊藤大貴（同研究員） 清水佳那子（同嘱託職員） 室 愛華（同嘱託職員）

令和元年度

　　萩 雅人（文化財課長） 山根雅之（世界遺産室長） 今岡一三（同主席研究員）

　　守岡利栄（同専門研究員） 伊藤徳広（同企画員） 梶谷美鈴（同企画員）

　　伊藤大貴（同研究員） 清水佳那子（同嘱託職員） 室 愛華（同嘱託職員）

石造物調査指導者

田中義昭（元島根県文化財保護審議会委員）

池上 悟（立正大学教授）

佐藤亜聖（公益財団法人元興寺文化財研究所主任研究員）

西尾克己（松江市史料編纂課松江市史松江城部会長）

調査参加者

現地調査

(調査指導者) 池上 悟
(立正大学院生) 足立佳代、高橋社人
(島根県教育委員会) 今岡一三、伊藤徳広、伊藤大貴、清水佳那子
(大田市教育委員会) 中田健一（石見銀山課長補佐）、山手貴生（同主任）
矢部俊一（同主任）
新川 隆、尾村 勝（同嘱託）

4. 実測図・写真・拓本等は石見銀山世界遺産センター（大田市大森町イ1597-3）において保管している。

5. 本書の執筆・編集は今岡、石造物の浄書等は伊藤徳広が行った。

本文目次

第1章 調査の目的・対象・経緯	1
第1節 調査の目的	1
第2節 調査の対象	1
第3節 調査の経緯	1
第2章 石見銀山遺跡の位置と歴史	4
第1節 石見銀山の位置と地質学的背景	4
第2節 石見銀山の歴史的背景	4
第3章 龍源寺間歩上墓地の調査	6
第1節 調査の経過	6
第2節 調査の方法	6
第3節 墓地の位置と立地状況	6
第4節 石造物の様相	14
第5節 龍源寺間歩上墓地の成果	17
第4章 妙像寺墓地の調査	31
第1節 妙像寺の概要	31
第2節 石造物の概要	31
第3節 まとめ	31

挿図目次

第1図 石見銀山遺跡全体図	3
第2図 石見銀山遺跡（銀山柵内・大森地区）周辺図	5
第3図 龍源寺間歩上墓地及び妙像寺墓地調査地点位置図	7
第4図 龍源寺間歩上墓地A～E地点石造物分布図	8
第5図 龍源寺間歩上墓地F・G・J地点石造物分布図	9
第6図 龍源寺間歩上墓地K・L地点石造物分布図	10
第7図 龍源寺間歩上墓地I・O地点石造物分布図	11
第8図 龍源寺間歩上墓地H・M・N地点石造物分布図	11
第9図 龍源寺間歩上墓地 年代別石造物造立状況	18
第10図 龍源寺間歩上墓地 石造物実測図（1）	19
第11図 龍源寺間歩上墓地 石造物実測図（2）	20
第12図 龍源寺間歩上墓地 石造物実測図（3）	21
第13図 龍源寺間歩上墓地 石造物実測図（4）	22

第14図	龍源寺間歩上墓地	石造物実測図（5）	23
第15図	龍源寺間歩上墓地	石造物実測図（6）	24
第16図	龍源寺間歩上墓地	石造物実測図（7）	25
第17図	龍源寺間歩上墓地	石造物実測図（8）	26
第18図	龍源寺間歩上墓地	石造物実測図（9）	27
第19図	龍源寺間歩上墓地	石造物実測図（10）	28
第20図	龍源寺間歩上墓地	石造物実測図（11）	29
第21図	龍源寺間歩上墓地	石造物実測図（12）	30
第22図	妙像寺墓地	石造物実測図	32

表 目 次

第1表	龍源寺間歩上墓地の石造物一覧表	44
第2表	妙像寺墓地の石造物一覧表	34

写真図版目次

- 図版 1 龍源寺間歩上墓地 F 地点
龍源寺間歩上墓地 F 地点
- 図版 2 龍源寺間歩上墓地 L 地点作業風景
龍源寺間歩上墓地石造物（1）
- 図版 3 龍源寺間歩上墓地石造物（2）
- 図版 4 龍源寺間歩上墓地石造物（3）
- 図版 5 龍源寺間歩上墓地石造物（4）
- 図版 6 龍源寺間歩上墓地石造物（5）
- 図版 7 龍源寺間歩上墓地石造物（6）
- 図版 8 龍源寺間歩上墓地石造物（7）
- 図版 9 龍源寺間歩上墓地石造物（8）
- 図版10 妙像寺墓地石造物

第1章 調査の目的・対象・経緯

第1節 調査の目的

石見銀山遺跡は中世から近世（特に戦国時代から近世初頭）、さらには近代へと長期間にわたって形成された遺跡である。石見銀山遺跡では開発から閉山に至るまでに、繁栄期・停滞期・衰退期・近代復興期のあったことが明らかになってきているが、この歴史過程を遺物や遺構といった考古学的事実に即して詳細に明らかにするとともに、さまざまな側面から鉱山遺跡としての特性を把握することにより、石見銀山の実態に迫ることが求められている。

本遺跡における石造物調査は、銀山の開発に関わった人々の信仰や葬送儀礼、社会の営みとその変遷の一端を明らかにすることを目的として実施している。

第2節 調査の対象

一概に石造物といつても①墓碑・石塔・石仏などの信仰関連石造物、②石臼や要石などの生産関連石造物、③街道沿いの道標などの交通関連石造物、④石切り場など生産地・流通関連石造物、など多種多様なものが認められる。それら全てが石造物調査の対象となることは言うまでもないことがあるが、現実には限られた時間・人員等の制約も多く、全てを調査することは困難である。

したがって、本石造物調査においては、上記の4つの区分のうち、埋葬関係の遺構群・遺物群の様相、すなわち墓地とそれを構成する墓石が、銀山の操業に直接または間接的に関わった武士・鉱夫・職人・商工業者とその家族等の存在ぶりを具体的に物語る資料であり、鉱山の盛衰（人口の増減等）をより直接的に反映するものと考えられることから、①の信仰関連石造物を主な対象として重点的に調査を実施し、先に挙げた目的に迫ることとしている。

第3節 調査の経緯

石造物調査（墓石）は、島根県教育委員会が石見銀山遺跡総合整備計画策定のため、昭和60年度に徳善寺跡などで、天正から慶長年間の紀年銘石塔を中心に一部の確認調査を実施したことが発端となっている。

平成9・10年度には石見銀山遺跡総合調査の一環として石造物調査が実施されることとなり、仙ノ山山頂周辺の石銀地区と龍源寺間歩上・妙本寺上墓地の調査が実施された。この調査では、石造物のグルーピングを心がけ、各群の規模と石造物の種類、あるいはその消長を抑えるため、紀年銘を持つ墓石の調査を重点的に進められた。墓石調査地の選定を発掘調査と連携した結果、天正や文禄年間の紀年銘のある墓石が発見され、古い墓石の存在する地区は生活していた時期も古い可能性が高いことが明らかになり、発掘調査箇所の選定にも有効であることが判明した。

こうした石造物調査の有効性が確認されたことから、調査の継続と計画の必要性が、石見銀山遺跡発掘調査委員会により指摘され、平成11年度からは以下の3つの調査を総合的に行うこととなつた。

- ①鉱山全体の石造物の傾向や変遷を把握し、悉皆調査の必要箇所について判断材料を得るための分布調査。
- ②特徴的な墓地の構造や変遷を把握するために行う悉皆調査。
- ③発掘調査等で得られた成果と関連付けるため、発掘調査地周辺の石造物やその他の資料について関連調査。

これら3つの調査のうち悉皆調査については、(1)銀山地区・大森地区に位置する、(2)群としてのまとまりが明確に把握できる、(3)アクセスが容易である、(4)調査環境が比較的よいなどの条件を満たした墓地のうち、重点的に本遺跡の最盛期と言われている戦国時代から江戸時代前半の墓地を選

び、継続的に調査する計画をたてた。

この方針に基づき、石造物調査は平成11年度から分布調査・悉皆調査・関連調査の組み合わせによって行われるようになり、妙正寺跡の悉皆調査を皮切りに6箇所の寺院墓地を中心とする悉皆調査、及び銀山柵内・大森地区の分布調査が実施された。これらの調査成果については、既に報告書が刊行されている。

平成16年度にはそれまでの調査成果をまとめ、検討を加えた報告書も刊行され、銀山柵内・大森地区における石造物調査は一定の成果を得るに至っている。

その後、平成17年度からは港や街道など周辺部における石造物の実態を把握するため、温泉津地区における調査が開始されることとなり、これまでに恵院寺、西念寺、金剛院、極楽寺の悉皆的調査と分布調査が行われた。なお、温泉津地区での石造物調査は、温泉津伝統的建造物保存対策調査や港湾調査、街道調査の際に実施されている。

平成22～23年度は、平成9・10年度に分布調査を行っていた石銀地区の悉皆調査を実施した。石銀地区は石見銀山に於ける初期鉱山業の中心の一角であり、墓II・III・IVの悉皆調査を通して、奉行・代官墓にも匹敵する規模の石塔群が樹立されていることが判明した。

平成24年度は、平成24～25年度の落石防護柵設置予定地に本經寺墓地があり、多数の石造物が存在することが確認されたため、こちらの悉皆調査と試掘調査を実施した。

平成25年度は、柄畠谷地区の市道大森三久須線の治山事業対象地である字甚光院周辺に石造物がまとまって存在することが確認されたため緊急的に悉皆調査を実施した。

また、大谷地区の高橋家裏の要害山南麓では、自然災害防止事業の対象地内に石塔が数基確認されたため調査を行った。

落石対策事業等の緊急調査以外には、清水谷地区本法寺跡にある銀山町役人・門脇家墓所と下河原天満宮跡で調査を実施している。

平成26年度は、石銀地区的墓地・石造物の全容を明らかにするため、同地区で未調査であった、墓I・墓II東・墓III東・墓IV・墓Vの悉皆調査を行った。

また、柄畠谷地区字甚光院についても、平成25年度調査地に隣接しながらも未調査であった南東側斜面と南側平坦面で悉皆調査を行い、墓域全体での変遷を把握することができた。

平成27年度からは、大田市教育委員会によって発掘調査が進められている昆布山谷地区を調査対象とし、石造物の様相や墓地の年代を明らかにするとともに、同地区の変遷について検討する資料を得ることとした。当年度は、同地区で古い石造物が密集する妙本寺上墓地E地点の悉皆調査を行ったほか、妙本寺上墓地G地点や虎岸寺跡墓地において銘文の調査を実施した。

平成28年度は、前年度に引き続いて昆布山谷地区の妙本寺上墓地を調査対象とし、群中でも最も古いと見られていたA地点について悉皆調査を実施した。

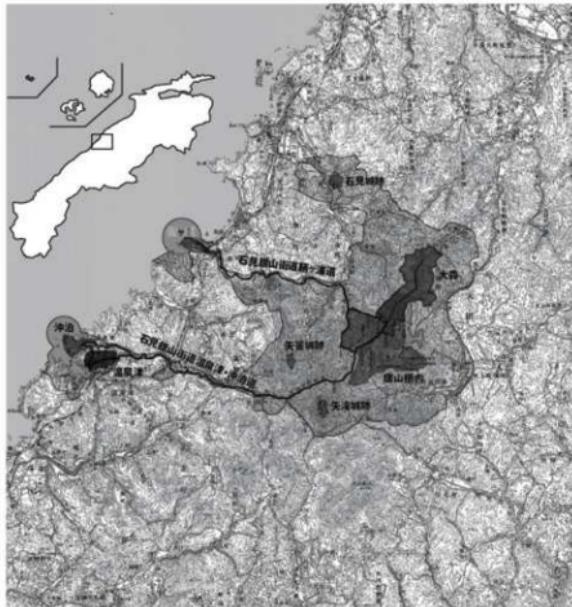
平成29年度も引き続き妙本寺上墓地のB、C、D、F、H地点の調査を行い、3年間にわたる妙本寺上墓地の調査が完了した。

平成30年度は妙本寺上墓地の北西側に位置する龍源寺間歩上墓地の調査を実施した。約250基以上の石造物が確認されたため、令和元年度も継続して調査を実施している。

【参考文献】

- 1 島根県文化財愛護協会1986『石見銀山関連遺跡分布調査報告』
- 2 島根県教育委員会他1999「城跡調査・石造物調査・間歩調査編」『石見銀山』第3分冊
- 3 島根県教育委員会他1999「民俗調査・港湾調査・街道調査編」『石見銀山』第6分冊
- 4 温泉津町教育委員会1999「1999 温泉津」
- 5 島根県教育委員会・大田市教育委員会2001『石見銀山遺跡石造物調査報告書1—妙正寺—』
- 6 島根県教育委員会・大田市教育委員会2002『石見銀山遺跡石造物調査報告書2—龍昌寺跡—』
- 7 島根県教育委員会・大田市教育委員会2003『石見銀山遺跡石造物調査報告書3—安養寺・大安寺・大龍寺跡・奉行代官墓所外—』

- 8 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書4—長楽寺跡・石見銀山附地役人墓地（河島家・宗岡家）』
- 9 烏根県教育委員会2004『石見銀山街道一輛浦道・温泉津沖泊道調査報告書』
- 10 烏根県教育委員会2005『石見銀山街道一輛浦・沖泊集落調査報告書』
- 11 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書5—分布調査と墓石調査の成果』
- 12 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2006『石見銀山遺跡石造物調査報告書6—温泉津地区鹿疣寺墓所』
- 13 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2007『石見銀山遺跡石造物調査報告書7—温泉津地区的石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査（1）』
- 14 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2008『石見銀山遺跡石造物調査報告書8—温泉津地区的石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査（2）』
- 15 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2009『石見銀山遺跡石造物調査報告書9—西念寺墓地（3）・安原備中墓・大光寺墓地』
- 16 大田市教育委員会2009『重要伝統的建造物群保存地区大田市温泉津伝統的建造物群保存地区 保存対策調査報告書（補訂版）』
- 17 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10—金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物』
- 18 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2011『石見銀山遺跡石造物調査報告書11—極楽寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地区』
- 19 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2012『石見銀山遺跡石造物調査報告書12—仙ノ山石銀地区墓Ⅲの調査』
- 20 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2013『石見銀山遺跡石造物調査報告書13—本經寺墓地の調査』
- 21 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2014『石見銀山遺跡石造物調査報告書14—柄畠谷地区字甚光院の石造物調査』
- 22 烏根県教育委員会2014『石見銀山一大谷地区 本經寺墓地発掘調査報告書—【山吹城南西麓の郭遺構の調査】』
- 23 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2015『石見銀山遺跡石造物調査報告書15—石銀地区墓Ⅰ・墓Ⅱ東・墓Ⅲ東・墓Ⅳ・墓Ⅴの石造物調査—一柄畠谷地区字甚光院の石造物調査』
- 24 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2016『石見銀山遺跡石造物調査報告書16—昆布山谷地区妙本寺上墓地E地点・G地点 虎岸寺跡の石造物調査』
- 25 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2017『石見銀山遺跡石造物調査報告書17—昆布山谷地区妙本寺上墓地A地点の石造物調査』
- 26 烏根県教育委員会・大田市教育委員会2019『石見銀山遺跡石造物調査報告書18—昆布山谷地区妙本寺上墓地B・C・D・F・H地点の石造物調査』



第1図 石見銀山遺跡全体図

第2章 石見銀山遺跡の位置と歴史

第1節 石見銀山の位置と地質学的背景

島根県は、日本海に面して東西約180km余りの長い県土を持ち、古代律令制以来の旧国単位では、「出雲」「石見」「隠岐」の3国からなる。石見銀山は、このうち「石見国」の東部、いわゆる「石東」といわれる地域に位置し、現在の行政区分では大田市に所在する。

石見地域では、江の川や周布川、高津川等の河口近くに若干の平野は広がるが、海岸部まで山地が迫っており、大規模な沖積平野は見られない。

石見銀山遺跡の中核をなす仙ノ山（標高538m）は、前期更新世（約100万年前）に火山活動をおこした大江高山火山群の北西部に位置している。大江高山、矢滝城山、葛子山、要害山、馬路高山などから構成されるこれらの山々は、「溶岩円頂丘」に分類され、粘性が高いデイサイトで山体が形成されている。

仙ノ山の鉱脈は、角礫火山岩やデイサイトの貫入岩体、凝灰角礫岩等を母岩とする。鉱脈には、鉱染鉱床型の福石鉱床、鉄脈鉱床である永久鉱床という2つの鉱床がある。福石鉱床の鉱石鉱物としては自然銀、菱鉄鉱を主体として、黄銅鉱などの含銅硫化鉱物をほとんど含まない。また、永久鉱床の鉱石鉱物は黄銅鉱、黄鐵鉱を主体とし、輝銀鉱、自然銀、ピスマスなどが含まれる。

第2節 石見銀山の歴史的背景

石東地域では、近年、開発事業に伴って縄文・弥生時代の遺跡の調査例が増えている。大田市仁摩町の潮川流域にある古屋敷遺跡、五丁遺跡群、川向遺跡などで縄文時代後期以降の遺物・遺構が検出された。弥生時代～古墳時代の集落跡は、大田市鳥井南遺跡や仁摩町大園の庵寺遺跡で確認されている。庵寺遺跡と同所の庵寺古墳群は石見地方で有数の規模の古墳群である。

平安時代前半期の遺跡では、綠釉陶器が出土した仁摩町殿屋敷遺跡や円面鏡が出土した大田市八

石遺跡が注目される。これらの遺跡では中世前期の貿易陶磁も出土し、河口に近い川岸に立地状況から海上交通との関連をうかがわせる。

こうした海岸部の遺跡の他に、仙ノ山から南西方向へ約1kmの地点に位置する白坏遺跡では、古墳時代の住居跡のほか、奈良・平安時代の建物跡や木簡が多数出土している。

平安時代末期には、石見銀山周辺を包括する大家荘という大規模な莊園が成立しており、その後、中世には石見銀山周辺に多くの莊園、国衙領が成立する。仁摩町天河内の白石遺跡、清石遺跡は、12～14世紀にかけて継続する遺跡で、総柱構造の主屋をもつ住宅遺構が検出されており、貿易陶磁器も一定量出土していることから、在地有力武士層の関与が考えられる。

南北朝期には、周防・長門の守護であった大内氏が石見國守護を兼任するが、応永の乱（1399）で敗れ、石見守護職を没収される。しかし、義弘の弟・盛見は、応永8（1401）年には大内氏の家督を実力で奪取し、石見国のうち邇摩郡を分郡として知行した。この分郡知行は大内政弘の代にも引き継がれた。永正年間（1504-1521）に至ると大内義興が石見一円の守護権を奪回した。

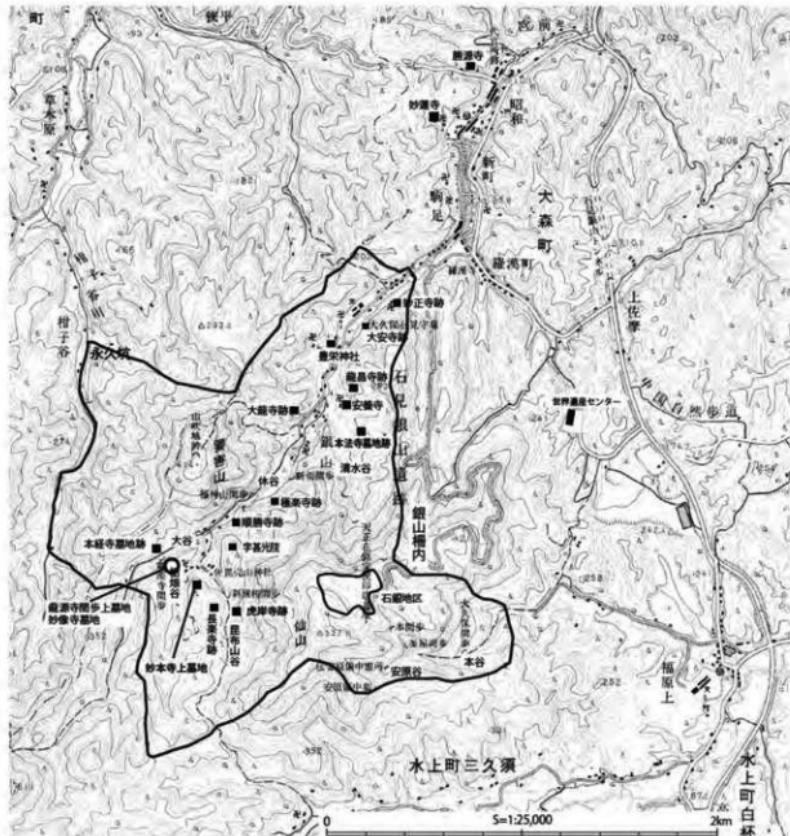
石見銀山は、『銀山旧記』では大永6（1526年）に博多の有力商人神屋寿蔵によって発見されたと記されている。大内氏は博多の有力商人と結び、中国との勘合貿易を独占的に行っており、大内氏の支配下で石見銀山の本格的な開発が行われるようになつた。天文2（1533）年には灰吹法が伝えられ、現地で製錬が行われるようになり、石見銀山の産銀量は急激に増大した。

戦国期には、大内氏や尼子氏、毛利氏により銀山領有をめぐる争奪戦が行われ、それに伴い多数の城館跡が銀山周辺や街道沿い、港周辺に遺されている。1560年代前半には毛利氏が尼子氏との銀山争奪戦に勝利し、石見銀山の支配権を確立した。

江戸期に入ると、石見銀山がある邇摩郡は、周辺の安濃郡などとともに石見銀山附御料に編入され、幕府直轄領となった。江戸初期は、初代奉行、大久保長安の開発により銀山は繁栄期を迎える。この頃の年間産銀量は約10,000貫（約37.5t）と推定されている。寛永期を過ぎると、良鉱が乏しくなったことや、坑道が深くなり湧水処理に多大な経費を要するようになったことにより、採算に合わない間歩は採掘が停止された。延宝元（1693）年以降の記録によると、産銀量は年間約

300貫（約1t）前後で推移し、幕末頃には年間約50貫（0.187t）を下回る状況であった。

明治維新後は、しばらく小規模な經營が続けられたが、明治19（1887）年に藤田組が經營をはじめ、近代的な鉱山開発が行われるようになつた。近代の主要產品は銅で、明治後期から大正初期には軍需景気に乗り隆盛をみた。しかし、第1次大戦後の銅価格低下を背景として大正12（1923）年に石見銀山は休山した。



第2図 石見銀山遺跡（銀山・大森地区）

第3章 龍源寺間歩上墓地の調査

第1節 調査の経過

龍源寺間歩上墓地は平成27年～29年度に調査を行った妙本寺上墓地の北西側に位置する丘陵先端部付近に所在し、龍源寺間歩の柄畠谷側出口までの尾根や斜面から柄畠谷側平坦面までにかけての広範囲に立地している。分布調査時には約200基以上とされていた石造物の数が平成30年度の悉皆調査時に250基近く存在していることが判明した。これらは標高238～284mの丘陵尾根上及び斜面の広範囲に点在していることから、A～Oまでの15地点に分けて調査を実施することとした。なお、悉皆調査は平成30年度～令和元年度の2年間実施している。

平成30年度は6月11日に立正大学副学長の池上悟氏と元興寺文化財研究所主任研究員の佐藤亞聖氏を招いて、第1回の調査指導会を開催した。内容は平成30年度計画の確認と今後の課題について指導を受け、悉皆調査の日程調整も行った。

悉皆調査は8月20日～22日の3日間、県・市職員のはか池上悟氏と立正大学院生2名も加わって実施した。しかし、限られた調査期間では全ての調査が終了できず、残った地点については次年度実施することになった。

令和元年度の悉皆調査は県・市職員のみで5月29・30日、6月17日の3日間、前年度残りの地点及び補足調査を実施した。その成果について12月5日に調査指導会を開催して報告書作成に向けての指導・助言を受けた。

第2節 調査の方法

悉皆調査は、事前に現地の下草等を除去したうえで石造物の分布状況を確認し、墓塔や墓標などに番号を付け、大田市教育委員会作成の「石見銀山遺跡地形図」を基におおよその地点を記録した。また、石造物調査カードを作成するとともに、個別の写真撮影も行っている。

調査カードには、実物の1／5で石造物を実測

し、種類・銘文など必要事項を記入している。銘文を持つもの一部については、拓本も採っている。

なお、今回の調査では石造物の点数が膨大であったため、近世中期以降の墓標類や無縫塔などについてはカードの作成や実測は省略し、石造物の種類・銘文の記録、規模の計測のみにとどめている。

第3節 墓地の位置と立地状況

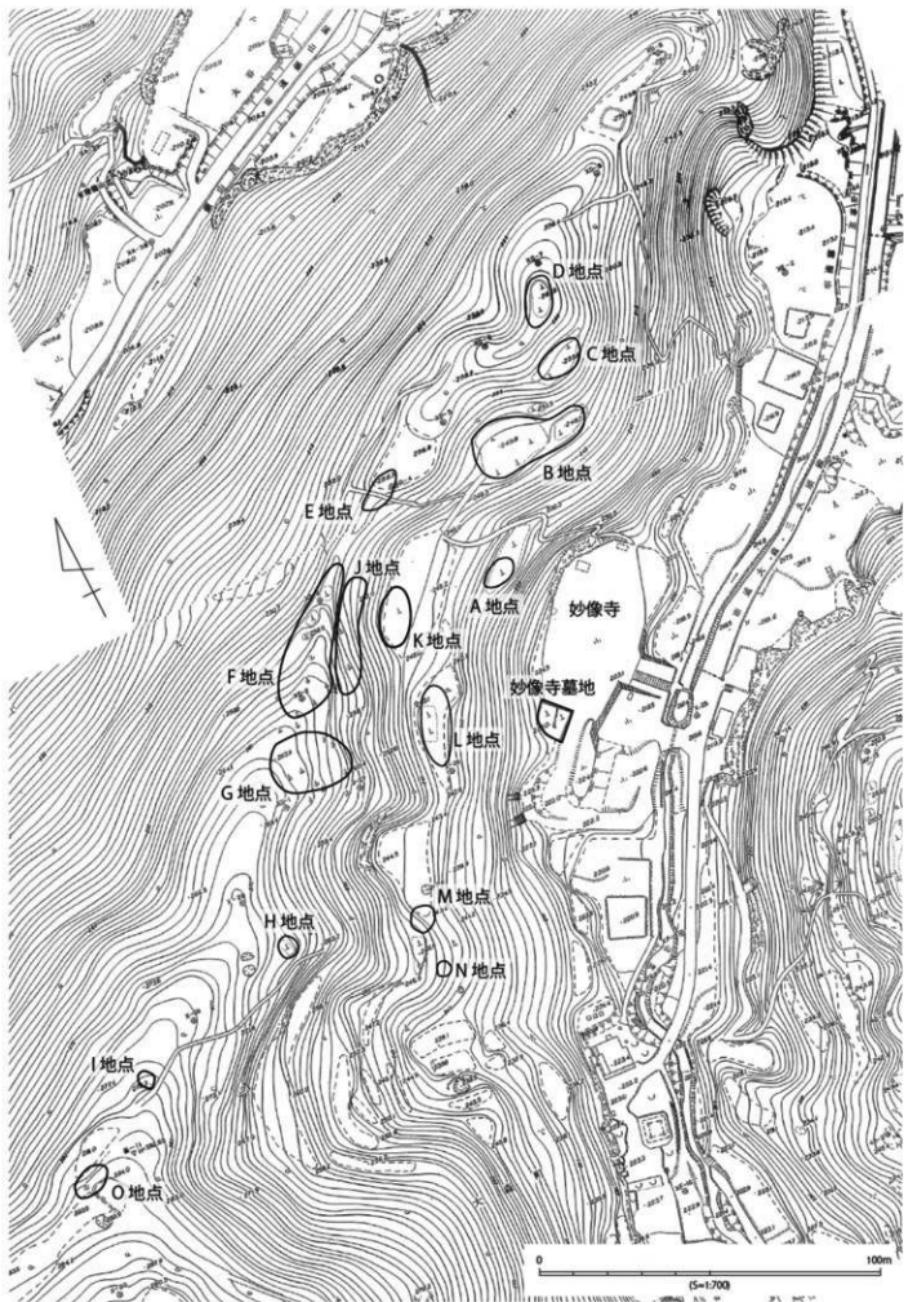
龍源寺間歩上墓地は柄畠谷の西側で南西から北東方向に延びる丘陵の尾根上から東側斜面中腹にかけて広範囲に立地する墓地である。今回調査を実施した地点は、大田市大森町ホ329、字名「柄畠谷寺ノ上エ」、ホ323「大鼓堂」、ホ323-3「柄畠谷正面院」、ホ285「大谷龍源寺山上」外に所在している。

字名にも見られるが、「龍源寺」と言われるように、かつては付近に寺院が置かれていたものと想定される。「石見銀山龜絵図」や「石見銀山百カ寺旧跡図」には龍源寺間歩付近に寺跡が示されているものの、確かな伝承もなく、寺院の性格や存続期間などについては不詳である。

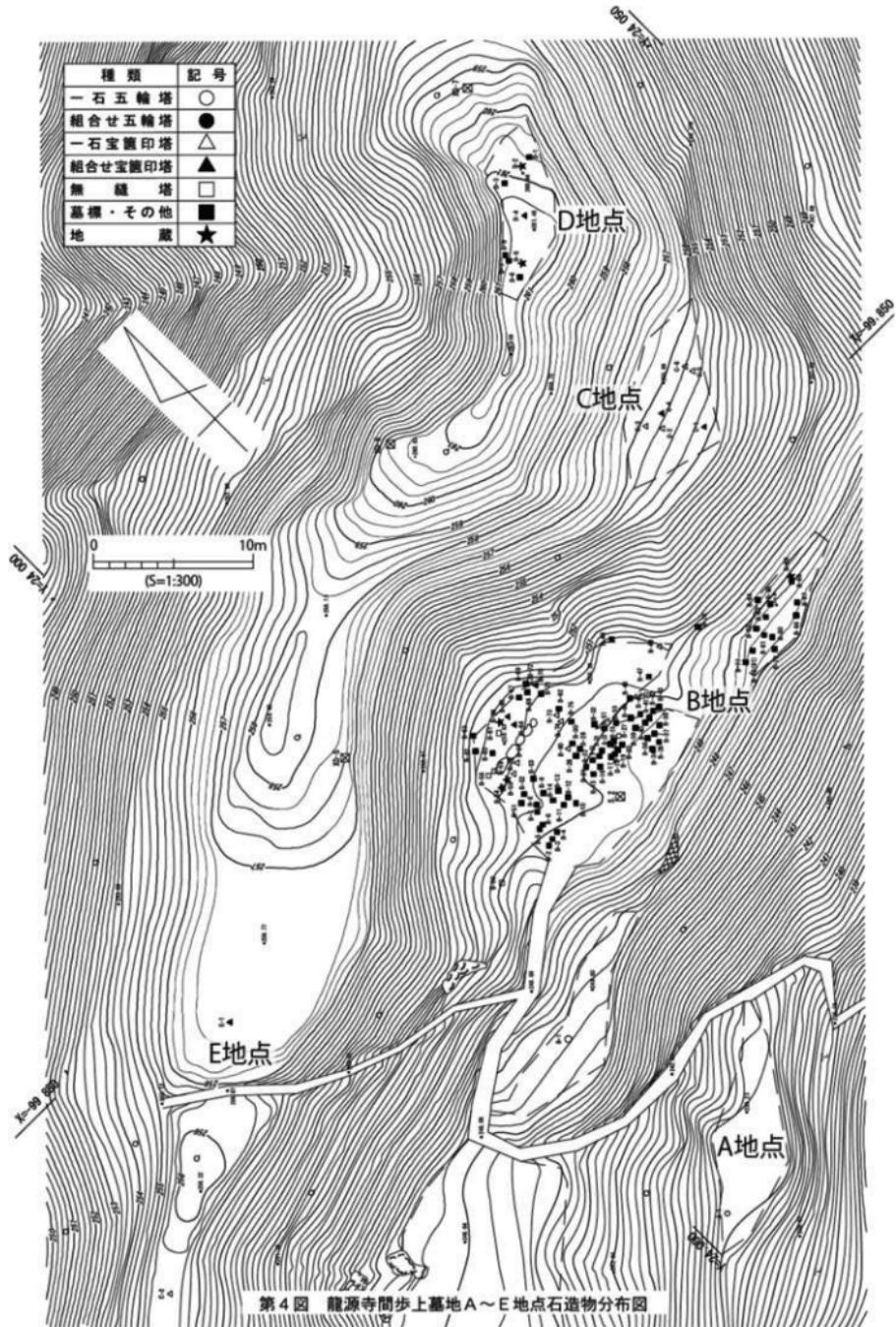
当墓地は墓域が点在することから15地点に分けて調査を実施しているが、位置関係の記載が煩雑になることから、ここでは便宜的に妙像寺跡から見た右側丘陵部と左側丘陵部、丘陵最高所の3箇所に分けて記述することにしたい。

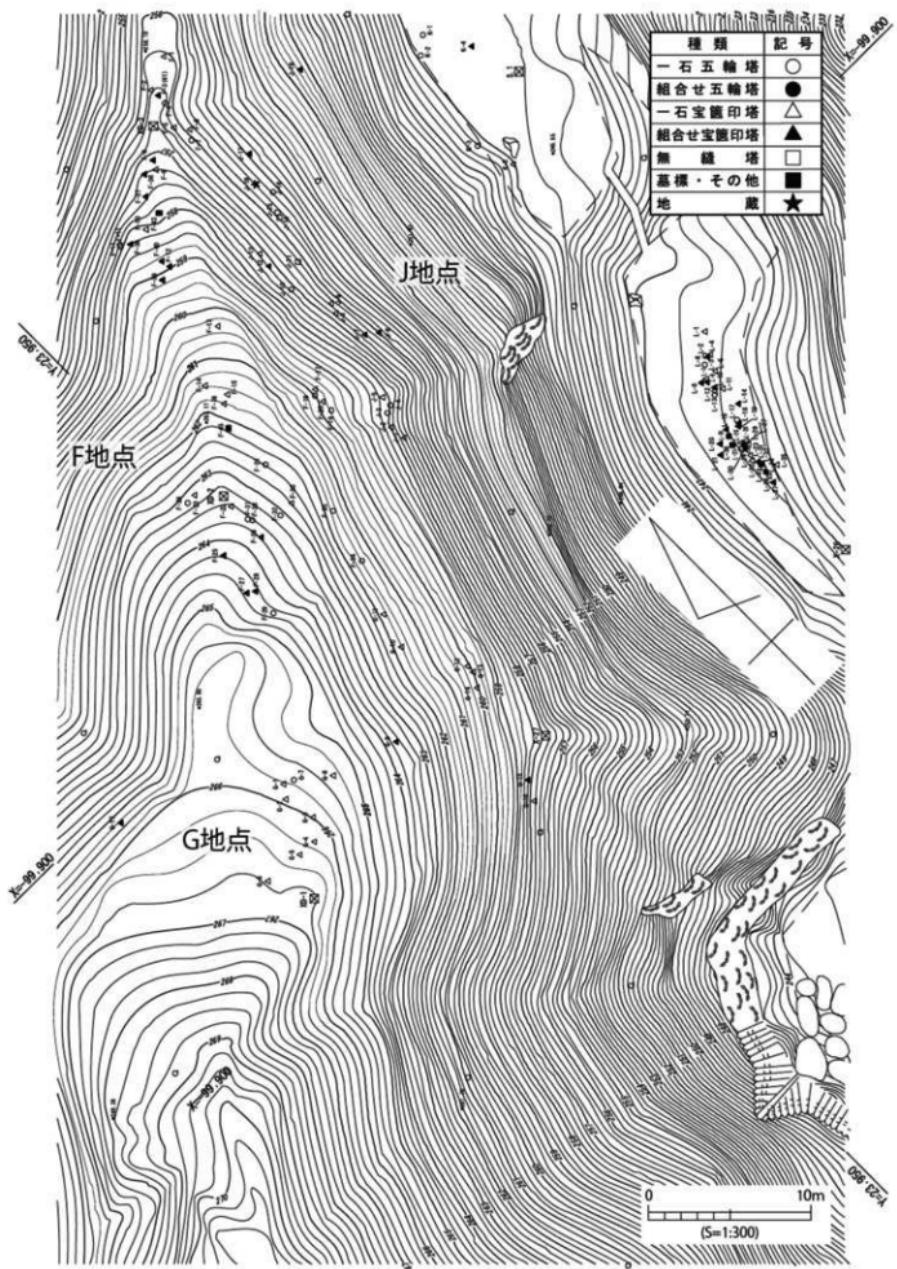
右側丘陵部

標高223mに所在する妙像寺跡の平坦面から見て右側に位置する尾根上及び斜面で、A・B・C・D・Eの5地点が所在する。妙像寺跡の北端から丘陵に登る小道が存在しており、それを登った標高239mの位置に小規模な平坦面を形成したA地点がある。そこからさらに登り、北東方向に屈曲した先を進むとB地点に至る。やや広く造成された平坦面と狭小な平坦面の2段で構成されて



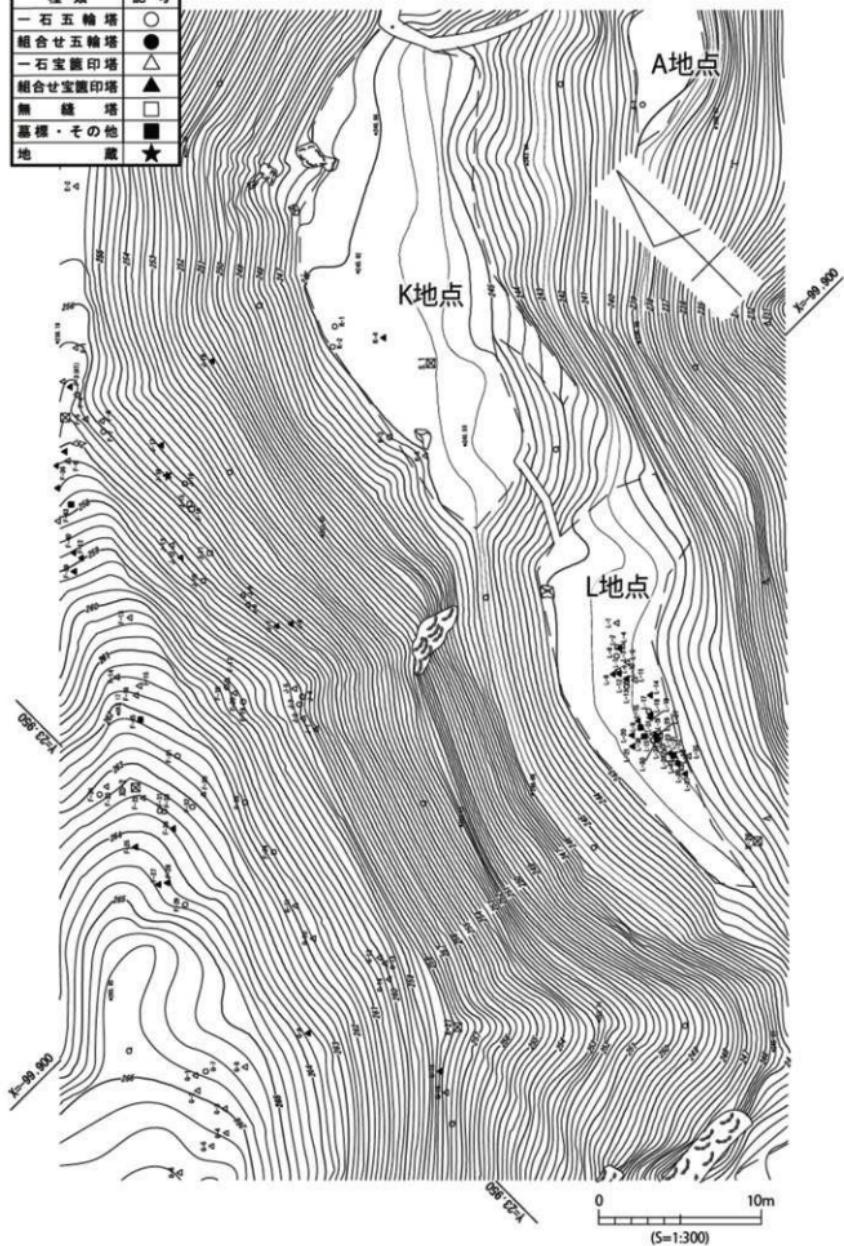
第3図 龍源寺間歩上墓地及び妙像寺墓地調査地点位置図



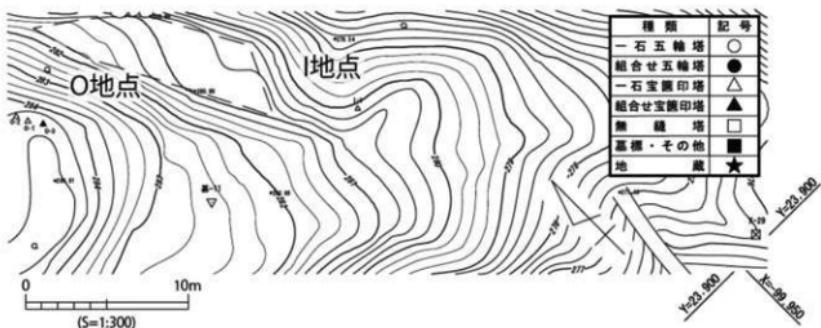


第5図 龍源寺間歩上墓地 F・G・J 地点石造物分布図

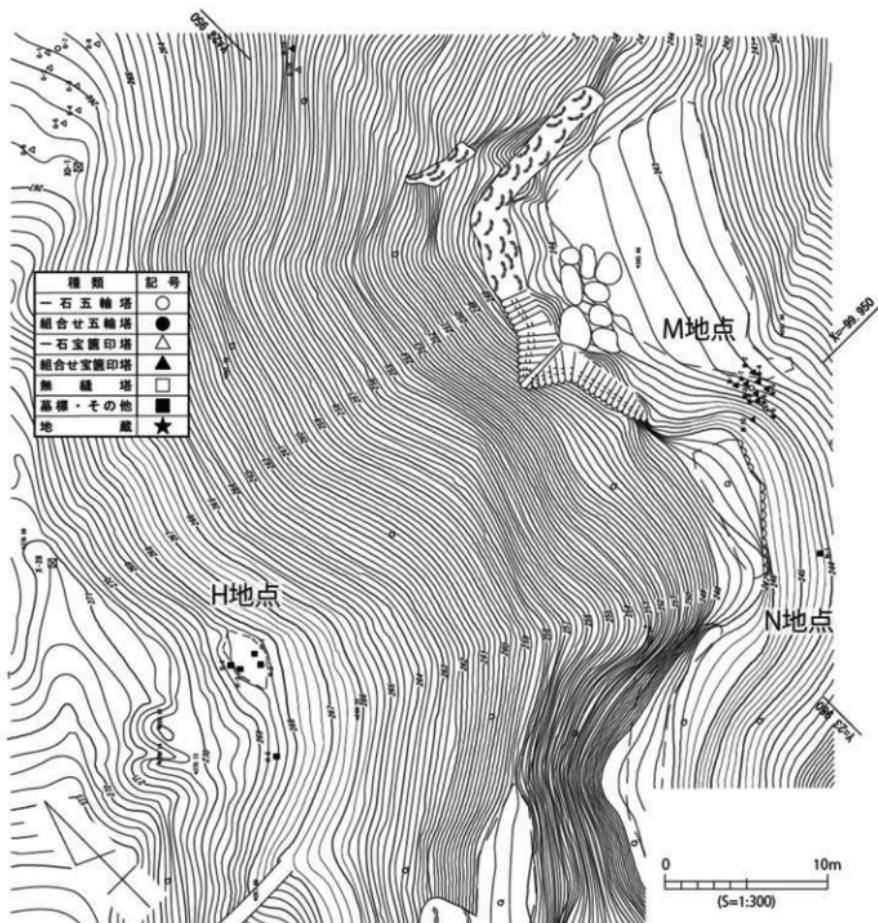
種類	記号
一石五輪塔	○
組合せ五輪塔	●
一石宝瓶印塔	△
組合せ宝瓶印塔	▲
無縫塔	□
墓標・その他	■
地 底	★



第6図 龍源寺間歩上墓地K・L地点石造物分布図



第7図 龍源寺間歩上墓地I・O地点石造物分布図



第8図 龍源寺間歩上墓地H・M・N地点石造物分布図

おり、前者に多数の石造物が造立されていた。標高は前者が249m、後者が248mとなっている。C地点はB地点の北東上部の標高255mに位置する狭小な平坦面である。そこから少し登った標高261m地点に尾根上の高まりを若干造成して平坦面を造り出した小規模な墓域であるD地点が造営されている。D地点から尾根上を約50m南西方向に少し下るとE地点となり、標高256mに位置する自然地形の細長い平坦面で墓塔が確認されている。

A地点（第4図）

長さ8m、幅3mの平坦面を造り出し、その先端の狭い範囲に明治の紀年銘がある墓標類と共に一石五輪塔1基が確認されている。墓標類は後世に寄せ集められた状況を示しており、一石五輪塔も上部等から転落していたものを同場所に収めた可能性が高いであろう。

B地点（第4図）

斜面を大規模に造成して墓域を形成したとみられ、長さ16m、幅12mの平坦面1とその横で1m下がった地点に長さ5m、幅3mの平坦面2を作り出している。2段の平坦面で構成された墓域となるが、平坦面1に石造物が密集して確認されている。当墓地内では最大数となり、墓塔も混在するものの、その大半は墓標類が占めていることから判断すれば新しい墓域と言えそうである。

その内訳は一石宝篋印塔6基、組合せ宝篋印塔2基、一石五輪塔3基、円頂方形型墓標45基、円頂方柱型墓標23基、位牌型墓標3基、変形墓標1基、自然石墓標1基、無縫塔3基、地蔵4基の計92基であった。なお、一石五輪塔には天正19（1591）年の紀年銘が刻まれたものが1基存在するが、これを含めた墓塔類は上部などから転落したもののが多いと推察される。

これら石造物の配置状況を見ると、平坦面1の左奥側に位牌型を変形して作られたと考えられる大型の変形墓標が設置されている。その右横には自然石墓標が設置され、左側には無縫塔が点在する状況で確認されている。これらの前面には円頂

方形型墓標などの墓標類が整然と並立した状態が窺える。

変形墓標は石見銀山遺跡の中では初めて確認された特異なものと言え、墓地整備の時期に墓地の供養碑等として建立された可能性も想定される。また、紀年銘が施されていないため時期の特定もできていない。

C地点（第4図）

緩斜面を若干造成して長さ3m、幅4mの小規模な平坦面を造り出している。確認された石造物は一石宝篋印塔4基、組合せ宝篋印塔1基、地蔵の台座1基の計6基であり、古い墓域の様相を示している。

D地点（第4図）

尾根上の高まりを少し造成して墓域を形成したとみられ、長さ8m、幅4mの平坦面に石造物が点在している。墓標類の他に組合せ宝篋印塔の台座や石殿の部材が含まれていることから墓塔と墓標が混在していた様相が窺える。その内訳は円頂方柱型墓標2基、円頂方形型墓標1基、地蔵2基、台座2基、石殿の屋根1基の計8基であった。

E地点（第4図）

自然地形と考えられる尾根上の細長い平坦面で一石宝篋印塔1基、組合せ宝篋印塔1基の計2基の墓塔を確認した。現状から推測すれば墓域として造営されていたとは考え難く、他の地点から運び込まれた可能性が高いものと理解される。

左側丘陵部

妙像寺跡の平坦面から見て左側に位置する尾根上及び斜面で、F・G・H・J・K・L・M・Nの8地点が所在している。上記E地点から約20m離れたF地点は標高256～265mの尾根上緩斜面に墓域が形成されており、多数の石造物が散乱している状況で観察された。G地点はF地点から南に約10m離れた東向き斜面に位置し、緩斜面から急斜面にかけて石造物が散乱する状況が確認されている。標高は258～267mを測る。そこから約30m

南に向かった標高268mの地点に狭小な平坦面があり、ここがH地点となる。J地点はF地点の東側斜面部分にあたり、やや急斜面となる標高251～262mの範囲に多数の石造物が点在していた。F地点周辺は石造物が密集する地区となっており、当墓地の中でも中心的な位置を占める地区と推察される。

J地点下方の標高246mの位置に造り出されたやや広い平坦面がK地点となるが、南端部分に石造物が集中していた。そこから1段下がって南に約7m進むとL地点に至る。標高243mの平坦面に石造物が密集して散乱している状況が観察された。そこからさらに南に約35m向かったところに広い平坦面が存在しているが、ここも南端で石造物が密集している部分がM地点となり、標高は243mを測る。N地点はM地点より10m南の標高244mの緩斜面で墓標が1基確認されている。

F地点（第5図）

尾根上緩斜面の長さ23m、幅10mの範囲に多数の石造物が確認されている。自然地形をほぼそのまま利用して墓域としているが、部分的に狭小な平坦面を造成して設置されたと考えられる石殿の基壇が3箇所確認できた。その周辺にはそれに関するであろう屋根材などの部材の他に、宝篋印塔などの墓塔類が多数散乱している状況であった。これらの中には本来石殿に収められていたものも存在していたはずであるが、残念ながら今回それを判別するまでには至っていない。

以上のようにF地点は墓標類を含まず墓塔を主体とする古相の墓域と言える。その内訳は一石宝篋印塔14基、一石五輪塔12基、組合せ宝篋印塔12基、台座2基、石殿部材2基の計42基であった。また、この中には慶長3（1598）年の紀年銘が刻まれた一石五輪塔1基が含まれている。

G地点（第5図）

尾根頂部から斜面にかけての長さ15m、幅9mの範囲に石造物が散乱している状況が観察された。それより下方にも石造物が数点確認できるものの急斜面のため実測等は不可能な状態であっ

た。

確認できた石造物の内訳は一石宝篋印塔13基、組合せ宝篋印塔4基、一石五輪塔1基、石殿の屋根1基の計19基であり、古い墓域の様相を呈している。

H地点（第8図）

緩斜面に長さ4m、幅3mの平坦面を造り出した墓標のみの新しい墓域である。その内訳は円頂方形型墓標3基、円頂方柱型墓標2基の計5基であった。

J地点（第5図）

G地点同様に緩斜面の長さ24m、幅10mの範囲に石造物が散乱している状況が観察された。これらの多くはF地点から転落したものと判断されるものである。斜面上部は緩斜面であるものの、下部はK地点を造成するために削平されたとみられ急斜面となっていた。この斜面の変換点部分で地蔵のレリーフが3面施された大型の組合せ宝篋印塔の基礎が確認されたが、危険であることと安全性の確保のため1面のみの実測にとどめている。

確認できた石造物の内訳は一石宝篋印塔9基、一石五輪塔4基、組合せ宝篋印塔3基、無縫塔3基、地蔵1基の計20基であり、墓石は古い様相を示している。

K地点（第6図）

J地点側の斜面を若干造成して長さ22m、幅10mの平坦面を造り出しているが、南端部分に石造物が集中していた。その内訳は一石宝篋印塔1基、一石五輪塔3基、組合せ宝篋印塔1基の計5基である。

一石五輪塔には当墓地では最古となる天正15（1587）年の紀年銘が刻まれたものが1基存在しており、このことから判断すれば当墓地の中で一番古い墓域の可能性が高い。また、組合せ宝篋印塔はJ地点で確認されたものと同様の地蔵のレリーフが3面施されたものである。この2基は石見銀山遺跡の中では珍しく特異なものとして注目されようか。

L地点（第6図）

K地点から続く一段低くなった平坦面である。長さ約10m、幅5mの範囲に多数の石造物が横倒して密集している状況が確認された。西側はF・G地点から下る急斜面となっているため、上部から転落したものが混在している可能性も推測される。

その内訳は一石宝篋印塔20基、一石五輪塔6基、組合せ宝篋印塔9基、尖頂方柱型墓標2基、尖頂方形型墓標1基の計38基である。尖頂型墓標は当地点のみで確認されており、他地点の円頂型墓標を主体とする墓域と相違が認められる。墓域による何らかの特徴が現れているのかもしれないが判然としない。このように墓標類も混在する墓域であるが、墓塔類が多くを占めることから古い墓域と考えておきたい。

M地点（第8図）

長さ18m、幅10mの平坦面が造成されているが、その南端部分の斜面側で石造物が寄せ集められたような状況で確認されている。斜面上方には石垣で構築された平坦面が存在することから推察すれば、この平坦面から転落したものの可能性が高い。内訳は一石宝篋印塔1基、一石五輪塔1基、組合せ宝篋印塔6基、地蔵の台座2基の計10基であり、古い墓石の様相を示している。

N地点（第8図）

緩斜面で位牌型墓標1基のみが確認されている。M地点同様に上部平坦面から転落した可能性が高く、そうであれば墓塔類は北寄りに、墓標は南寄りに造立されていたものと想定されようか。

丘陵最高所

I・Oの2地点が所在し、丘陵先端付近のD地点からO地点までの距離は約220mとかなり離れた位置関係にある。また、F地点から約90m離れた標高280mのI地点までは石造物は確認されず、離れた位置に墓域を形成したとみられる。

I地点は狭小な尾根の西側斜面で墓塔を僅か1基のみ確認した。現状では墓域とは言えない状況

にある。このI地点から約20m先にO地点があり、D地点同様に尾根上の高まりを造成して小規模な墓域を造り出していた。また、標高284mと龍源寺間歩上墓地の中では最高所に形成された墓域でもある。

I地点（第7図）

自然地形の緩斜面で一石宝篋印塔1基が確認されている。現状から判断すればここに設置されていたとは考え難く、O地点から転落したもの的可能性が高いであろう。

O地点（第7図）

当墓地では最高所に位置する墓域である。長さ4m、幅3mの狭い平坦面を造り出して墓塔類3基が造立されていた。その内訳は一石宝篋印塔2基、組合せ宝篋印塔1基である。なお、組合せ宝篋印塔には天正19(1591)年の紀年銘が刻まれており、造立数は僅かであるが古い墓域と言えそうである。

第4節 石造物の様相

今回確認された石造物は墓塔や墓標、地蔵などを含めて13種類におよぶ。数量などを詳細に記すと一石宝篋印塔72基、一石五輪塔31基、組合せ宝篋印塔40基、変形墓標1基、自然石墓標1基、地蔵7基、石殿4基、台座8基、無縫塔6基、位牌型墓標4基、円頂方形型墓標49基、円頂方柱型墓標27基、尖頂方形型墓標3基の総数253基となる。このうち石塔を中心として168基の実測を行っているが、風化や破損の著しいものも多く、図示できたものは129基である。

一石宝篋印塔（第10～13図）

風化や破損の著しい個体も多く、ほぼ完形のものから相輪の一部を欠損するもの46基を図示している。総高は7の107cmが最大で、4の76.5cmが最小となる。

1～5は相輪の宝珠下部及び相輪下部に請花を持ち、6～12は相輪下部のみに請花、宝珠の中央付近に溝を施すものである。13～40は相輪上部を欠損するため宝珠の形態は不明であるが、相輪下

部に請花を持つ。41～46は残存する相輪下部の形態から判断して、42のような伏鉢と九輪の間に突帯を巡らせるものと推測される。

請花意匠は基本的に蓮弁と間弁を表現しているが、中には特異な意匠を有するものも見られる。3は宝珠の中央に溝を施し、その下部の請花蓮弁は3重輪郭、相輪下部の請花は蓮弁が3重輪郭で間弁が2重輪郭となっている。12も相輪下部の請花が3と同様の形態となる。42は笠の軒下に請花を施すもので、組合せ宝篋印塔の笠に類似する作りである。

紀年銘が明確に判読できたものは13基あり、G地点で確認された20の元和5（1619）年が古く、F地点で確認された9の享保4（1719）年が新しいものとなる。

判読できた戒名には「居士」、「禪定尼」、「禪定門」の位号が認められた。これら以外に10には相輪に「清淨」、笠に「法」、搭身に「身」、26では笠に「西」、搭身に「來」、31の搭身には「常」等の定形以外の銘を施しているものも存在する。また、5と9には「空・風・火・水・地」が刻まれ、43の搭身には直径9cm弱の日輪を線刻しているが、内側の梵字の有無は確認できなかった。これら墓石の大半には「妙法蓮華経」の文字やその一部が刻まれており、日蓮宗の墓石であることが分かる。

一石五輪塔（第14・15図）

30基図示した。表面の風化が著しく剥離の認められるものも存在するが、ほぼ完形に近いものが15基確認できた。総高は50の80cmが最大で、60の49cmが最小となる。

紀年銘が判読できたものは11基あり、天正15（1587）年から正徳4（1714）年までの期間が確認できた。17世紀前後のものとしては、K地点の54が天正15年と一番古く、龍源寺間歩上墓地の中でも最も古い紀年銘となる。次いでB地点の55が天正19（1591）年、F地点の56が慶長3（1598）年、同じF地点の64が慶長13（1608）、同地点の58が寛永4（1627）年の順となっている。

戒名には「童子」の他に「禪尼」の位号も認められる。その他には一石宝篋印塔の例と同様に定形外のものが認められ、52は「從冥入於冥」、56は「欠伽羅婆阿」の文字が刻まれている。また、55には「空・風・火・水・地」が刻まれている。墓石の大半に「妙法蓮華経」の文字やその一部が刻まれており、一石宝篋印塔と同様に日蓮宗の墓石と言える。

組合せ宝篋印塔（第16～18図）

相輪16基、笠14基、搭身2基、基礎8基の計40基を確認した。相輪の個体数からみれば最小でも16基以上が存在することになる。各部位が別造りのため本来の組合せや数量を確認することは困難であり、単体での32基を図示している。

77～85は相輪である。九輪と伏鉢の境に突帯を巡らすもので、宝珠下部と突帯上部に請花を持つもの（77～81）と宝珠下部のみに持つもの（82～85）に大別される。このうち80の請花蓮弁は2重輪郭、83は蓮弁、間弁とも2重輪郭となっている。

86は相輪と笠部を一石で作り出したものである。笠底面には枘穴が認められ、別材で作られた搭身及び基礎と組合せられるものである。この下部に相当するものとして106がある。これは搭身と基礎を一石で作ったもので、搭身上部に枘が残る。これが本来の組合せと考えた場合、二石宝篋印塔であったことが想定される。

87～99は笠で、98・99以外は軒下に請花を持つ。請花は蓮弁と間弁を有するものが大半を占めるが、97のように蓮弁のみの特異なものも認められた。軒上の段級は2段が基本となるが、92・97のような3段も稀に存在する。また、87は高さ38cm、幅52cmと大型のものであるが、その組合せになる部材は認められない。

100は解説不明な記号のようなものが刻まれた搭身である。

101～105は上面に反花座を有する基礎である。このうち101は反花座上部に細かい縦連子を有するもので、正面中央には格狭間を施して、その中

央に「地」の文字を刻む。銘文から供養塔として造立されたことが分かる。

107・108も基礎であるが、1面の中央に地蔵2体のレリーフと左右に銘文、これを3面に施した石見銀山遺跡では初見の特異なものと言える。地蔵のレリーフは2体とも合掌するものが1面、左側が錫杖を持ち、右側が合掌するものが2面となっている。なお、銘文については風化の著しい部分が多く、残念ながら判読までには至らなかった。

基礎が少なく、紀年銘が確認できたものは2基だけである。このうち明確に判読できたものはO地点の104のみで、天正19（1591）年と記されている。B地点の101も天正元号を持つが、風化が著しく年までは判読できなかった。

戒名には「禪定門」や「禪定尼」の位号が認められたものがある。この他に「妙法蓮華經」の文字やその一部が刻まれたものも少なからず存在するため、日蓮宗の墓石と言えそうである。

変形墓標（第19図）

109の1基を確認した。位牌型墓標の笠の両端を切断して丸めて仕上げたような形態を呈する大型の変形墓標である。下端部を欠損し、正面に「南無妙法蓮華經」が刻まれているが、紀年銘は記されず造立時期は不明である。この墓標は上述した107・108と同様に石見銀山遺跡の中では初めて確認された特異な形態として注目される。墓地整備の時期に墓地の供養碑等として建立された可能性も想定されるものの断定はできない。

自然石墓標（第19図）

一定の形状を呈するものではなく、自然石を僅かに加工した墓標であり、110の1基が確認された。

2段の台石を伴い、正面には「十五世僧那院日遵大徳」の法名がある。紀年銘等から文化11（1814）年に弟子の日要が住職の菩提を弔うために造立されたことが分かる資料である。

位牌型墓標（第19図）

111～114の4基を確認した。114は下半を欠損するが、その他は本体下部に納を有している。こ

のうち111には享保19（1734）年の紀年銘が記されている。

地蔵・台座（第20図）

台座のみのものを含め8基確認しているが、頭部欠損や顔面剥離のものが多い。115～119は座像であるが115は台座を有する。120は光背型の立像、121は光背型の座像で両者とも蓮華座を伴う。115・118・120は輻轂、116は如意宝珠を持ち、117・121は合掌するものである。122は地蔵の台座で上面に楕円形状の水受が彫り込まれている。

紀年銘が記されたものは3基あり、120が寛保3（1743）年、115が天明6（1786）年、122が文化8（1811）年と記されている。また、戒名には「童子」、「信女」が認められた。

石殿・台座（第21図）

石殿の部材及び組合せ宝篋印塔の台座を7基確認している。123・124は組合せ宝篋印塔の反花付台座である。基礎部を受ける部分は前者が37cm、後者が20cmを測ることから、設置されていた宝篋印塔の規模がある程度推測可能で、123は大型、124は小型であったと想定される。

125以降は石殿の部材である。125は底板で、上面に幅6cm、深さ2.5cmの「コ」の字状の壁板落とし込み用の溝が彫り込まれている。溝の内法は奥行き46cm、幅39cmとなり、収納された墓塔の大きさが推定可能である。126～129は屋根材である。平面形は129が長方形を呈し、その他は正方形に近いものである。

無縫塔

B・J地点で6基確認されているが、計測と銘文調査のみにとどめている。このうちの1基には天保4（1833）年紀年銘が判読できた。

墓標類

B・D・H・L地点の4箇所で円頂方形型墓標49基、円頂方柱型墓標27基、尖頂方形型墓標3基の計79基が確認されているが、B地点が大半を占める。また、無縫塔と同様に計測と銘文調査にとどめている。

多くの墓標に紀年銘が記されており、享保19

(1734) 年から文久 3 (1863) 年までのものが確認できた。戒名には「信士」、「信女」、「童子」、「童女」の他に、「禅定門」の位号が認められるものがあるが、中には院号を持つものや、「法師」、「大徳」など僧侶との関係が窺われるものも存在しており、被葬者に住職関係や有力檀家層が含まれていることが推察されようか。また、戒名の上には「釋」及び「妙法」が用いられるものが多く、浄土真宗と日蓮宗の墓石が混在している状況を示している。

第5節 龍源寺間歩上墓地の成果

今回の調査によって、龍源寺間歩上墓地における石造物群の概要を把握することができた。以下、その成果等を簡潔に述べ、まとめとしたい。

最も多く墓石が確認されたのは右側丘陵部に造成されたB地点である。総数92基のうち76基が円頂方形・方柱型、位牌型などの墓標が占める比較的新しい墓域の様相を呈している。次いで左側丘陵部のF地点で総数45基が確認された。こちらは一石五輪塔や一石宝篋印塔などの墓塔で構成される古い様相を呈する墓域である。その次はF地点の下部に所在するL地点となり、こちらも墓塔を中心とする古い墓域で38基の墓石が確認されている。その他の墓域は20基以下の少数の墓石で構成される小墓域となっている。

これら墓石には紀年銘や戒名などが刻まれたもののが多く認められたが、中にはそれらを持たないもの、あるいは判読できないものもあり、必ずしも明確とまでは言えないが、造営時期や宗派等を少なからず窺い知ることができる資料となった。

判読できた紀年銘を見る限りでは、墓塔は天正15 (1587) 年から享保4 (1719) 年、墓標類は享保19 (1734) 年から文久 3 (1863) 年までのものが存在し、およそその変遷を読み取ることが可能である。このうち古い紀年銘を持つものはK地点で確認された一石五輪塔の天正15 (1587) 年が最も古く、次いでB地点の一石五輪塔とO地点の組合せ宝篋印塔の天正19 (1591) 年、F地点の一石

五輪塔に刻まれた慶長3 (1598) 年の順となっている。

上記の古い紀年銘を持つ墓塔は便宜的に分けた3箇所の丘陵部分にそれぞれ存在していることになる。ただし、B地点は先述したとおり墓標類を中心とする新しい墓域と考えられるため、上方に位置するC・D地点から転落したもの可能性が高いであろう。しかしながら、このことは16世紀末に独立した3箇所の地点において同時期頃に墓域造営が開始されたことを物語っている。なお、隣接する妙本寺上墓地では天正13 (1585) 年の紀年銘が確認されており、両墓地がほぼ同時期に造墓を開始していることも判明した。

造墓状況について紀年銘から判断すると、墓塔造立は17世紀前半に一時ピークを迎えるが、18世紀初頭で終焉する。3箇所での造立状況を確認すれば、左側丘陵部のF地点を中心とした周辺に多数の墓塔が集中しており、残り2箇所ではそれと比較すると少数となる。F地点では石殿の基壇が3箇所確認されていることも併せて考えると造墓開始期の龍源寺間歩上墓地の中では左側丘陵部が中心的な墓域と推察され、尾根上に石殿を中心とした墓塔が密集して造立されていた様子が想像されようか。

その後、18世紀前半以降になると墓標類主体の墓域が展開されることになり、19世紀初頭にピークを迎える。墓標類はB・L・H・Nの4地点で確認されているが、B地点が圧倒的多数を占める。これは右側丘陵部のB地点を中心とした造墓活動に移行したことが看取される。

このように造墓活動を見ると、17世紀前半頃と19世紀初頭頃に2時期のピークを迎えている。これはこれまでの石見銀山遺跡の石造物調査においても、多少の様相は異なるものの2時期の盛期が認められることと共通する事象である。

次に戒名を見ると、墓塔には「妙法蓮華経」の文字やその一部が刻まれたものが大半を占めることから16世紀末から18世紀初頭頃は日蓮宗の墓地として造営されていたことが分かる。墓標類には

「妙法」及び「釋」がほぼ同数の状況を示しており、18世紀前半以降は日蓮宗と浄土真宗の墓石が混在する共同墓地として運営されていたとの見解が示される。この共同墓地化についても石見銀山遺跡の中では普遍化した現象の一つである。

次に、龍源寺間歩上墓地でしか見られないものとして地蔵のレリーフを持つ宝篋印塔の基礎と変形墓標が挙げられる。

地蔵のレリーフを持つ宝篋印塔基礎は2基確認されており、どちらも大型の範疇に入る。1面の中央に地蔵2体のレリーフと左右に銘文、これを3面に施した特異なものである。石見銀山遺跡の中では類例を見ない初例のものとして大変興味深い。銘文については風化の著しい部分が多く、残念ながら判読までには至らなかった。ただし、断定はできないものの經文らしき銘文が記されているように見えることから、供養塔などとして造立された可能性が高いであろう。また、紀年銘の有無についても確認することは困難を極め、造立年代についても不詳と言わざるを得ないが、確認地点の様相から判断すれば、16世紀末～18世紀初頭の期間が想定されよう。

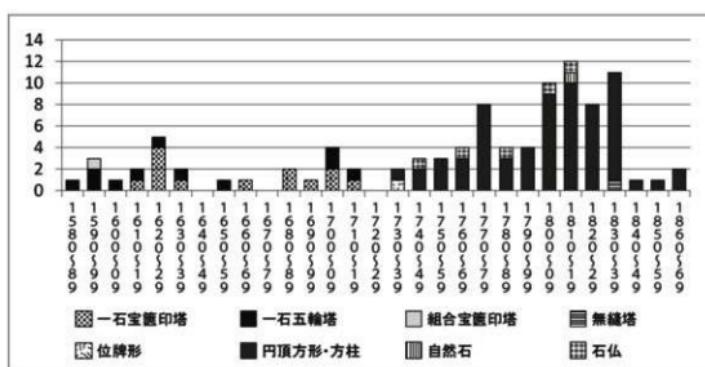
変形墓標も石見銀山遺跡の中では初めて確認された特異な形態として注目される。墓地整備の時期、特にB地点造成時に墓地全体の供養碑等として建立された可能性が推測されるが断定はできな

い。ただし、配置状況から考察すれば、変形墓標は墓域の左奥側に設置され、その右横に自然石墓標、左側には無縫塔が確認されている。そしてこれらの前面に円頂方形型墓標などの墓標類が整然と並立している状態が観察され、規則性を持って整備されたことが窺える。これら墓標の中には住職等に関わる墓標も少なからず存在することから、僧侶関係の区画を供養するものの可能性もあるが判然としない。いずれにしても今後この両者については類例を待って検討していく必要がある。

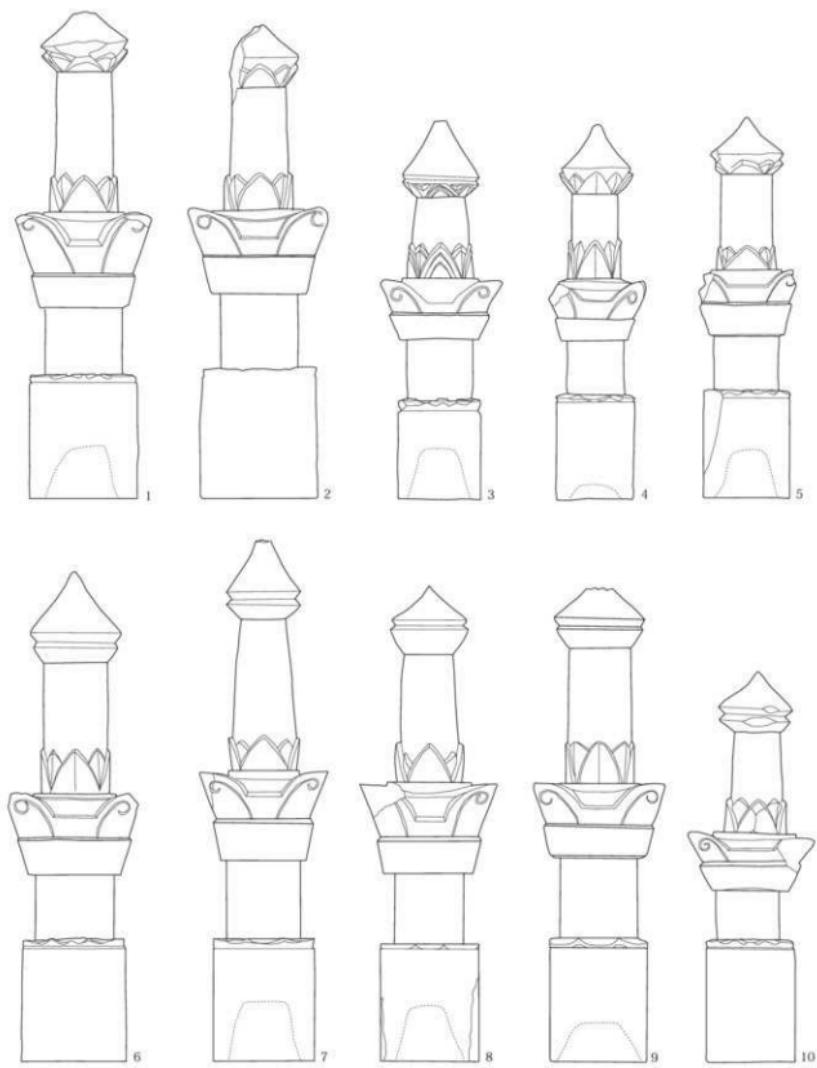
以上のように龍源寺間歩上墓地の成果について簡潔に記した。第3節で述べたとおり龍源寺についての宗派や性格、存続期間などについては不詳である。しかし、当墓地の下位に位置する妙像寺については『石見銀山百か寺』で元亀3（1572）年に創建された日蓮宗の寺院で、平成5年の火災によって全焼して廃寺となっていることが分かっている。当墓地は妙像寺の裏山に位置し、日蓮宗の墓地として16世紀末から運営されていることから判断すれば、妙像寺の墓地として形成されたと考えるのが妥当であるかもしれない。

【参考文献】

- 三瓶古文書を読もう会 『石見銀山百か寺』1995
「石見銀山施給図」「高橋家文書」

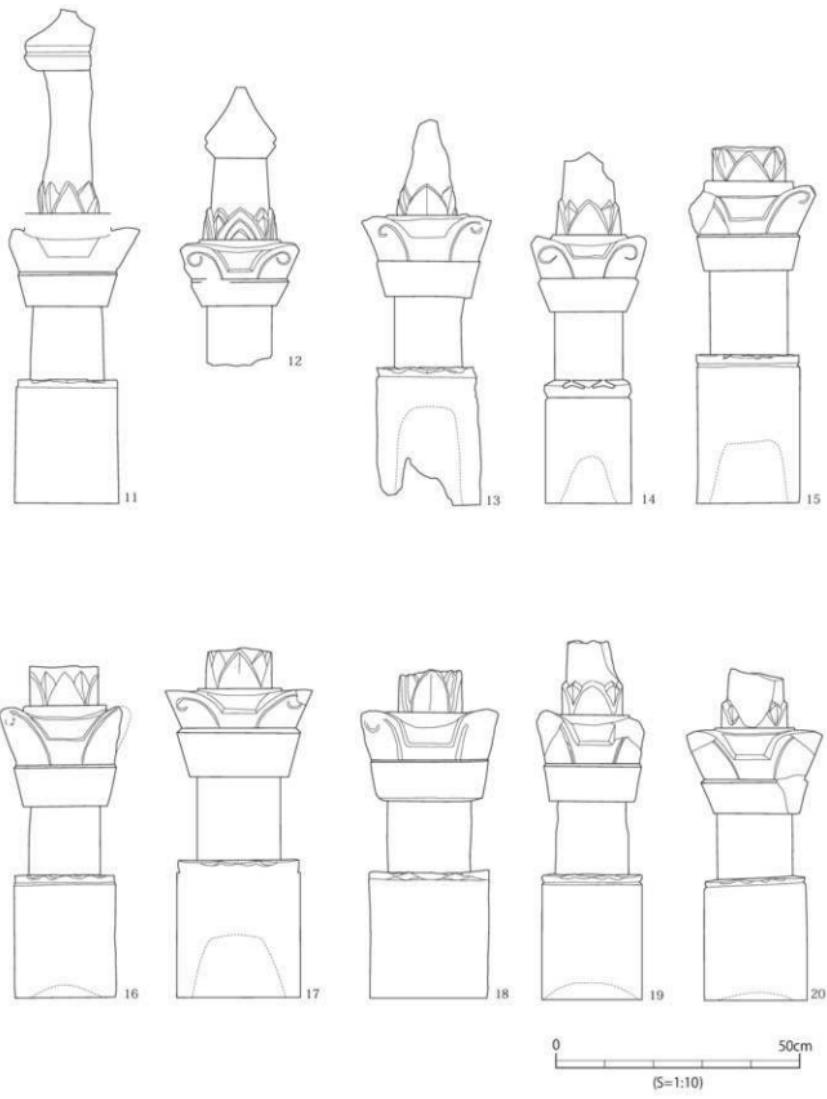


第9図 龍源寺間歩上墓地 年代別石造物造立状況

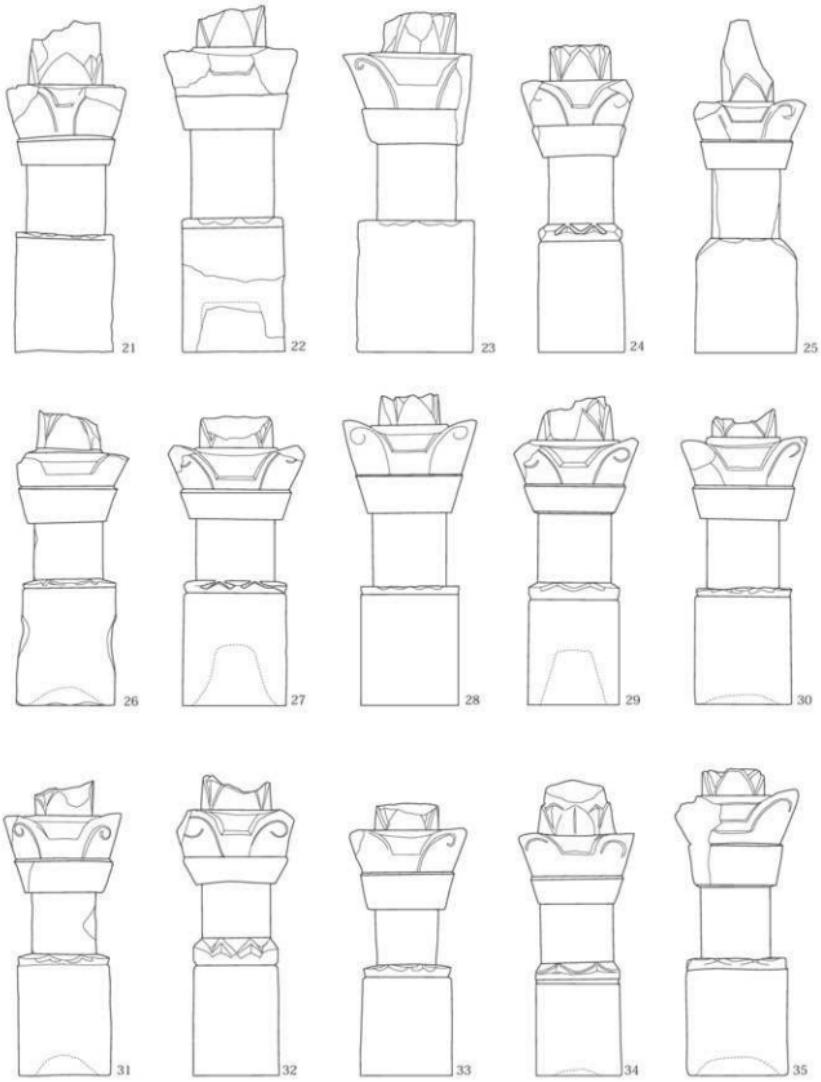


0 50cm
(S=1:10)

第10図 龍源寺間歩上墓地 石造物実測図 (1)

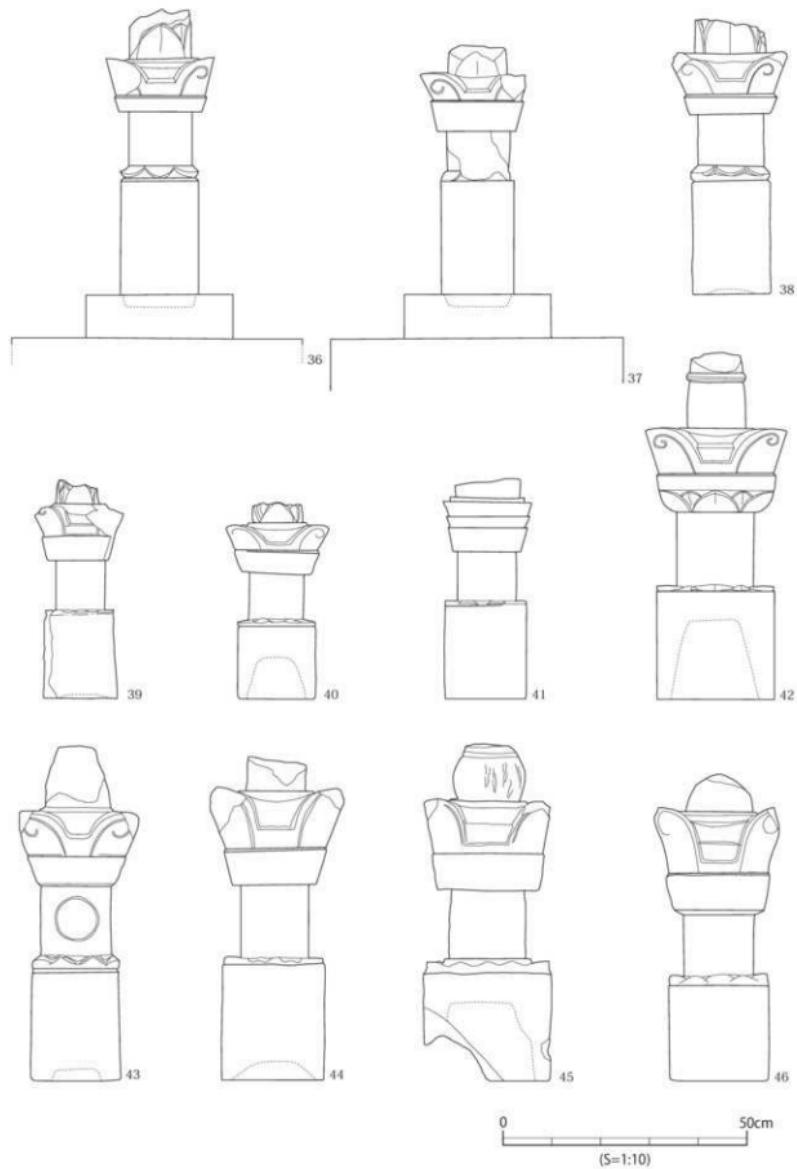


第11図 龍源寺間歩上墓地 石造物実測図 (2)

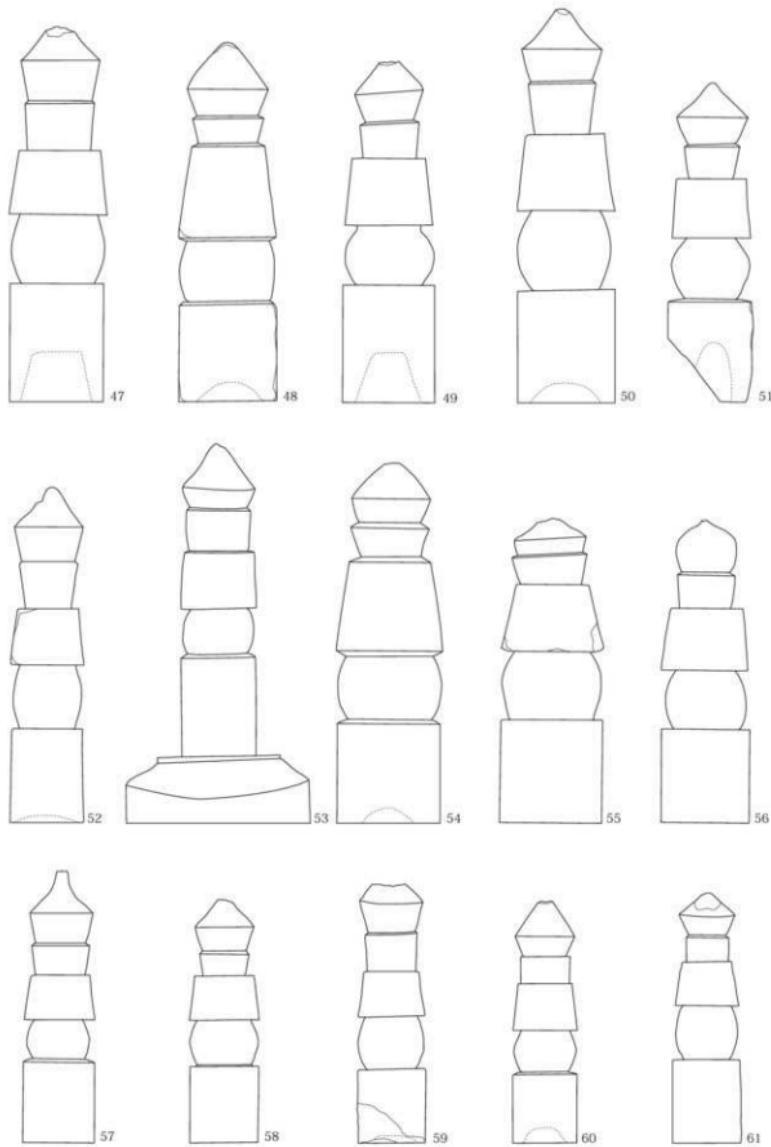


0 50cm
(S=1:10)

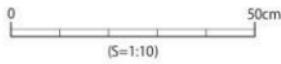
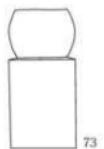
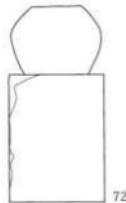
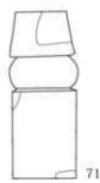
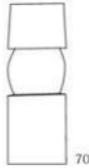
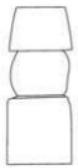
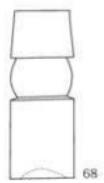
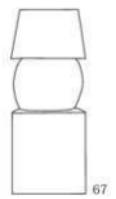
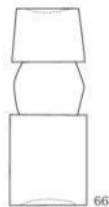
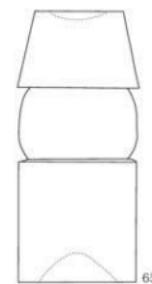
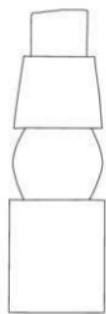
第12図 龍源寺間歩上墓地 石造物実測図 (3)



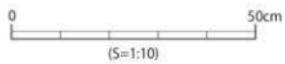
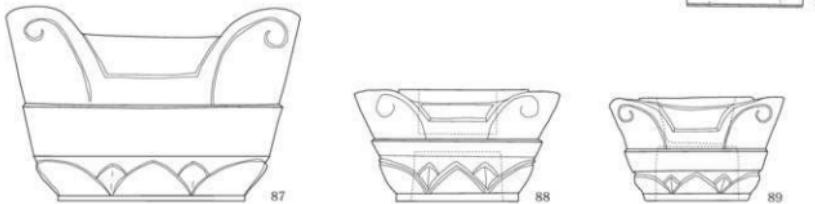
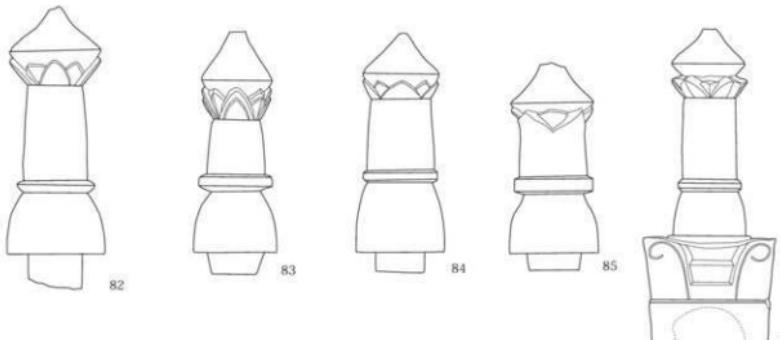
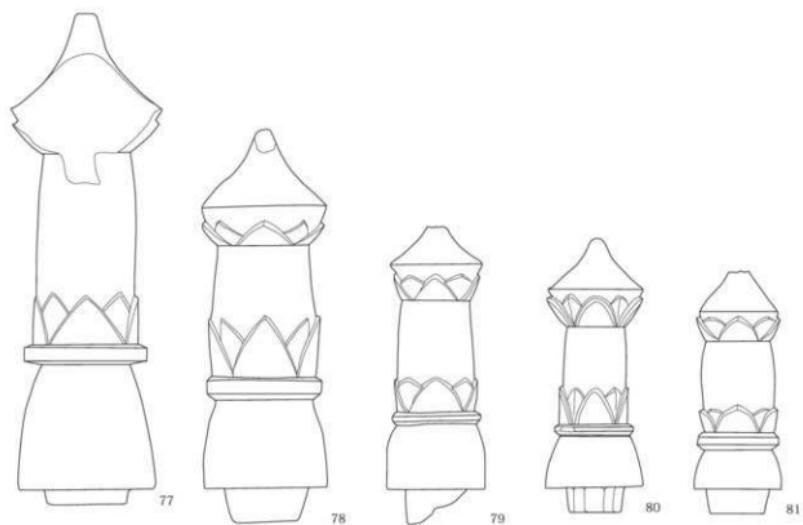
第13図 龍源寺間歩上墓地 石造物実測図 (4)



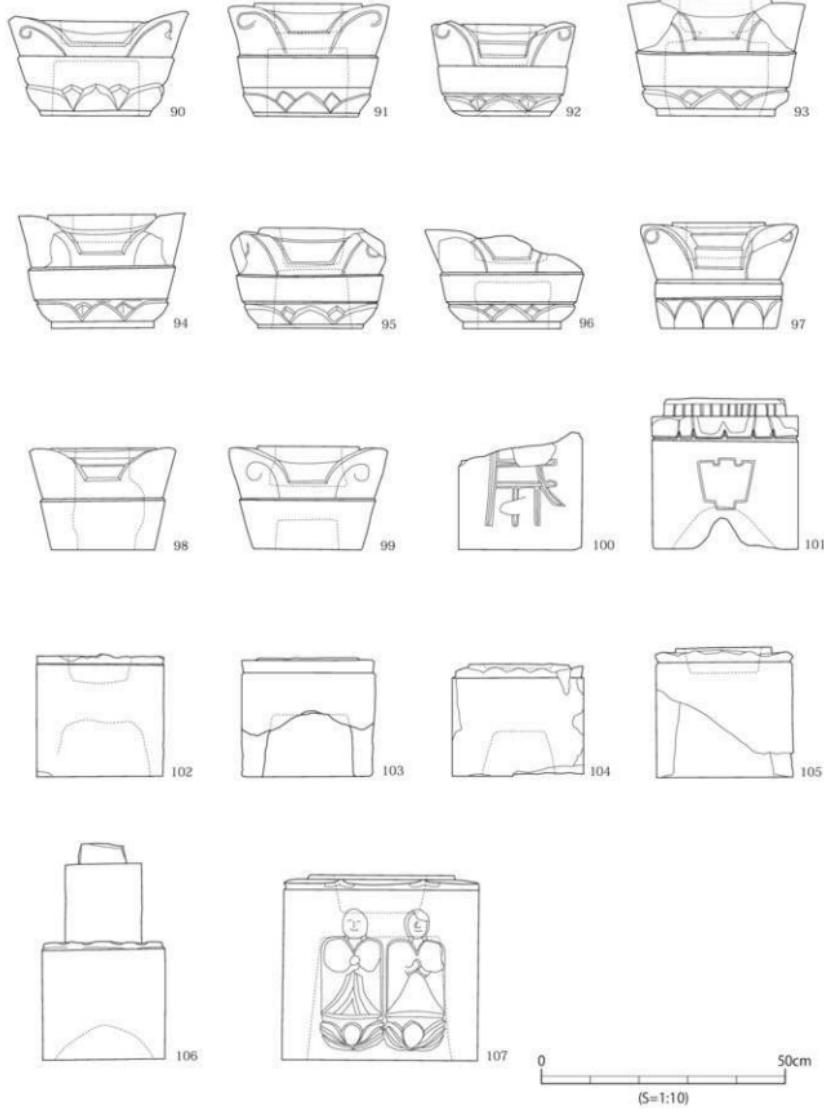
第14図 龍源寺間歩上墓地 石造物実測図 (5)



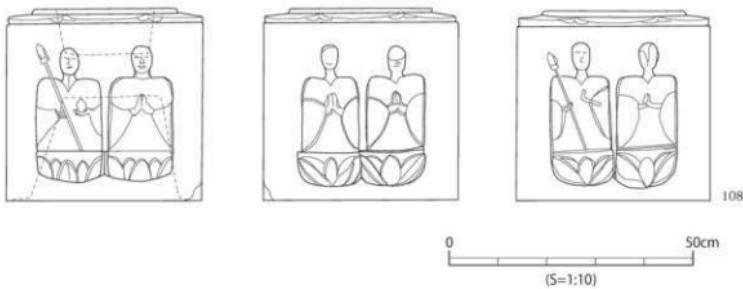
第15図 龍源寺間歩上墓地 石造物実測図 (6)



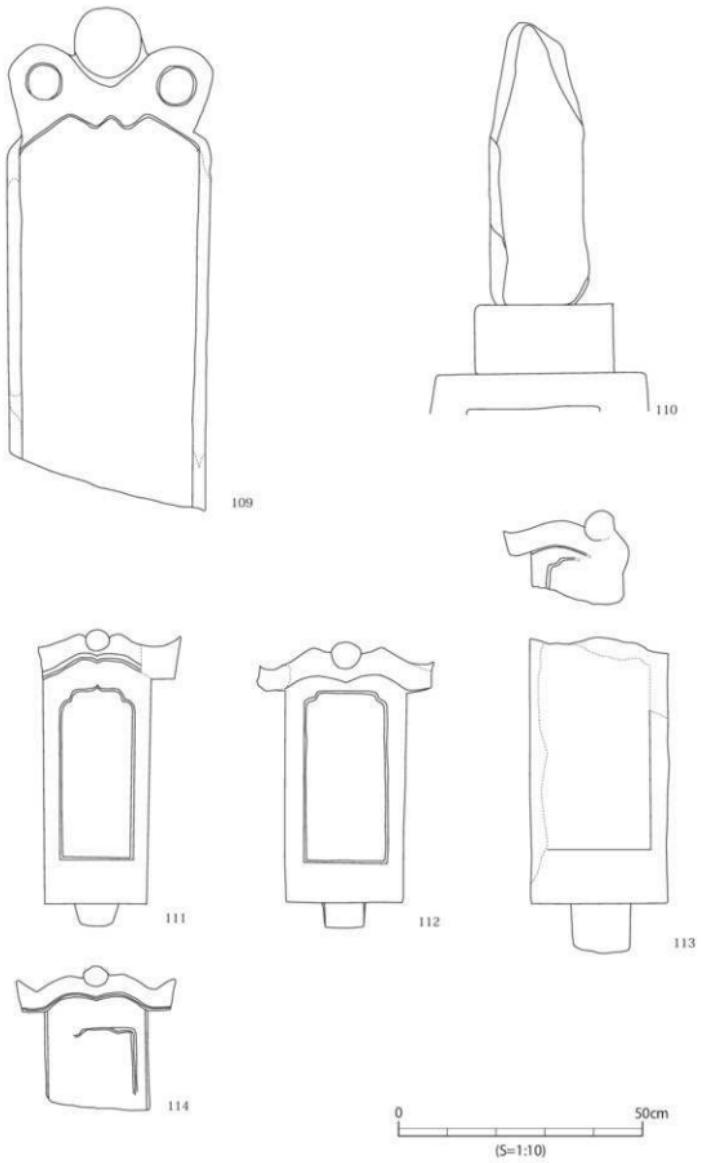
第16図 龍源寺間歩上墓地 石造物実測図 (7)



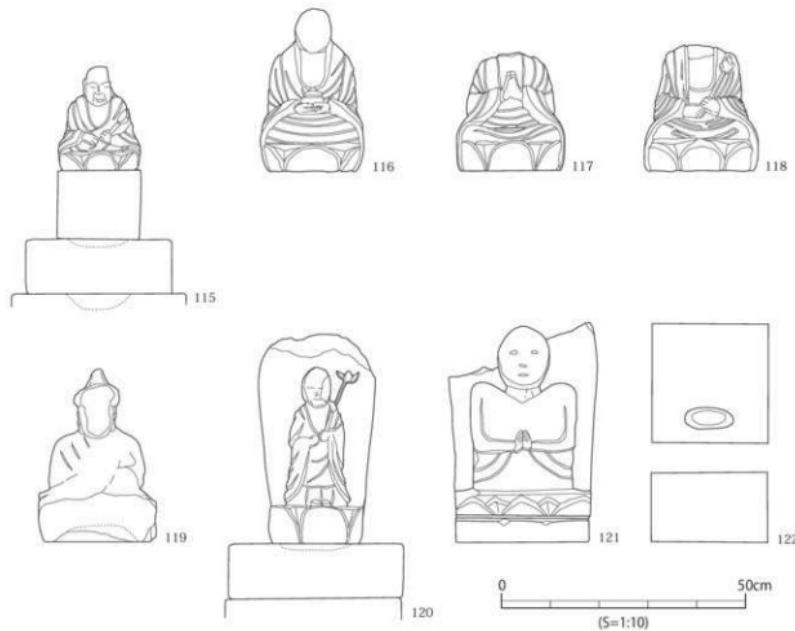
第17図 龍源寺間歩上墓地 石造物実測図 (8)



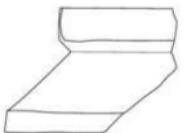
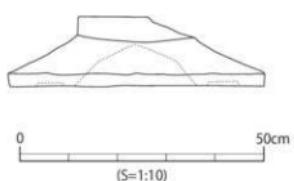
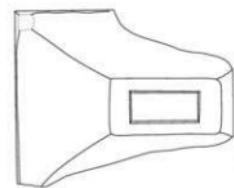
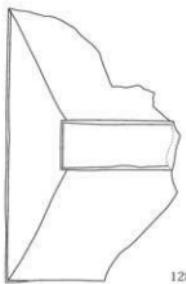
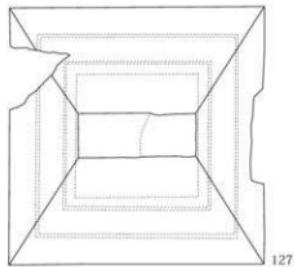
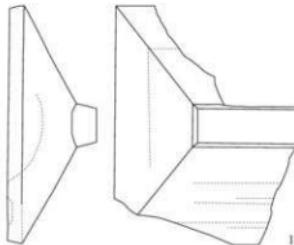
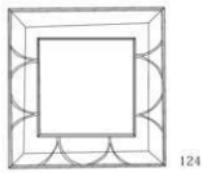
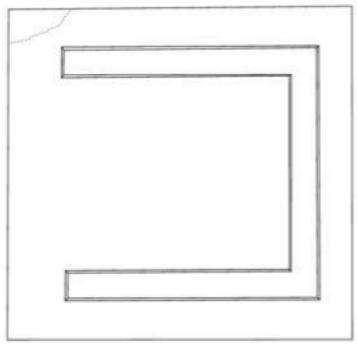
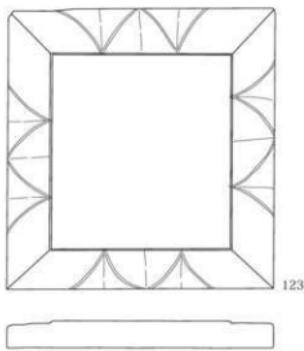
第18図 龍源寺間歩上墓地 石造物実測図 (9)



第19図 龍源寺間歩上墓地 石造物実測図 (10)



第20図 龍源寺簡歩上墓地 石造物実測図 (11)



第21図 龍源寺間歩上墓地 石造物実測図 (12)

第4章 妙像寺墓地の調査

第1節 妙像寺の概要

妙像寺は法淨院日真が創建した日蓮宗の寺院である。『石見銀山百か寺』によれば、元亀3(1572)年の創建から平成までに3回の火災に遭ったことが知られている。平成5年の火災により全焼して廃寺となり、現在は温泉津町恵院寺預かりとなっている。

旧境内地は龍源寺間歩柄畠谷側出口から北側に延びる市道大森三久須線の西側に位置する丘陵裾部沿いに広がる平坦地に所在する。境内地の南端に狭小な墓地があり、それが今回調査を行った妙像寺墓地となる。

第2節 石造物の概要

龍源寺間歩上墓地の調査と併せて実施しており、確認できた石造物は組合せ五輪塔1基、組合せ宝篋印塔1基、円頂方形型墓標4基の計6基であった。今回このうちの3基を実測して図示している。この3基は山裾側に横並びに造立されており、向かって左側から図示した1~3の順となっている。なお、残りの3基は組合せ宝篋印塔の笠1基と墓標2基で、3の右隣に積み重ねて置かれており、墓標には明治期の紀年銘が記されていた。

1は5段の台石を有する組合せ五輪塔で、台石を含めた高さは2.53mを測る。五輪に「妙法蓮華經」の文字、地輪に「五百五拾年為遠忌宝塔」の銘文が刻まれている。2は2段の台石を有する円頂方形型墓標で、台石を含めた高さは2.11mを測る。「聖人五百遠忌之宝塔」の銘文が判読できた。両者とも日蓮聖人の五百五拾年及び五百遠忌報恩のために造立された宝塔のようである。3は1段の台石を有する円頂方形型墓標で、台石を含めた高さは1.65mを測る。銘文から先祖供養のために造立されたものであることが分かる。

第3節 まとめ

今回調査を行った妙像寺墓地では日蓮聖人の遠忌報恩のための宝塔と先祖供養の墓標が確認された。周囲には原位置を保たない墓石があるものの墓地とするより供養の場としての様相が強く、本来の墓地は裏山に位置する龍源寺間歩上墓地の中に含まれているようである。平成10年度に実施された分布調査においても龍源寺間歩上墓地の範囲は明確ではなく妙像寺墓地も含むとされている。その中で妙像寺墓地としてのブロックは2箇所となっており、1箇所はB地点の可能性が高いが、もう1箇所については明確には判断できなかった。しかし、第3章でも述べたように、龍源寺間歩上墓地については妙像寺墓地として造営された可能性が高いと理解しておきたい。

【参考文献】

- 島根県教育委員会他「城跡調査・石造物調査・間歩調査編」『石見銀山』第3分冊1999
三瓶古文書を読みうる会『石見銀山百か寺』1995



第22図 妙像寺墓地 石造物実測図

				22	挿図番号
				3	報告書番号
					地 点
6	5	4	3		調査№
組合せせきゆういん印塔	円頂方彫型墓標	円頂方彫型墓標	円頂方彫型墓標		種 別
				165.0	全 高
				64.0	最大幅
				為〇〇氏先祖	銘 文
笠					備 考
					西 曆

凡 例

- 第1表には、石見銀山遺跡の柄畠谷地区に所在する龍源寺間歩上墓地、第2表には同地区の妙像寺墓地の石造物を掲載した。
- 各石造物の規模は基本的に高さ及び最大幅をセンチメートル単位で掲載した。欠損している場合は残存している規模を()内に記載した。
- 複数部材からなる石造物の高さ・最大幅は、上の部材の高さ+下の部材の高さ、上の部材の最大幅／下の部材最大幅、と記載した。
- 銘文は戒名が書かれている面を正面とし、向かって右側を右面、左側を左面、反対側を背面としている。複数の面に銘を持つ場合は、正面) … 右面) … と記載している。
- 銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不明部分及び文字の存在が推定される部分は〔 〕で示し、銘文の上下が欠損して字数が不明な場合は〔上欠〕、〔下欠〕と示した。また推定できる文字は□の後に()と表示した。
- 戒名及び名字は基本的に伏字で○○とした。
- 実測図を掲載していない石造物についても一覧表に掲載し、今後の研究の資料とした。
- 写真図版及び挿図の個別番号は一覧表の番号に対応する。

					14	17	17		17			17	15	掲図番号
					59	93	96		105			103	73	報告番号
M	M	M	M	M	M	M	L	L	L	L	L	L	L	地點
7	6	5	4	3	2	1	38	37	36	35	34	33	33	調査№
組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	地蔵の台座	地蔵の台座	一石五輪塔	組合せ宝篋印塔	一石五輪塔	種別							
(140)	(280)	18.0	18.0	(52.5)	24.0	20.0	(19.5)	26.5	(33.5)	(33.0)	23.5	(27.0)	全高	
24.0	18.0	18.0	18.0	14.0	36.0	32.5	19.0	28.0	15.5	20.0	26.5	14.0	最大幅	
					蓬	蓬		口	妙					銘文
塔身	相輪			頂部先端欠損	笠	笠	相輪下部	基礎	相輪		基礎	水・地輪のみ		備考
														西脇

22	22	掲図番号
2	1	報告番号
		地點
2	1	調査№
円頂方形型墓標	組合せ五輪塔	種別
211.0	253.0	全高
73.0	116.0	最大幅
聖人五百五拾年 為遠忌塔	五百五拾年 為遠忌塔	銘文
		備考
		西脇

**第一表
妙像寺墓地の石造物一覧表**

17		10	19	16	13		掲図番号
104		6	111	78	43		報告番号
O	O	O	N	M	M	M	地點
3	2	1	1	10	9	8	調査№
組合せ宝篋印塔	一石宝篋印塔	一位牌型墓標	組合せ宝篋印塔	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	種別
23.0	(57.0)	99.0	60.0	79.0	(68.0)	31.0	全高
27.0	25.0	26.5	28.5	25.0	24.5	32.0	最大幅
右圖 享保十九年正月十三日 左圖 丁時天正廿九十月廿七日	口○ [] [] [] []						銘文
基礎	相輪上部欠損			相輪	相輪欠損	笠	備考
1591			1734				西脇

	16	15		13		14	13		12	16	12		掲回番号
	85	76		46		57	34		22	82	23		報告番号
L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	地點
19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	調査№
一石五輪印塔 組合せ宝圓印塔	一石五輪塔 組合せ宝圓印塔	尖頂方形基標	一石五輪印塔 組合せ宝圓印塔	一石五輪塔 組合せ宝圓印塔	一石五輪印塔 組合せ宝圓印塔	一石五輪塔 組合せ宝圓印塔	一石五輪印塔 組合せ宝圓印塔	一石五輪印塔 組合せ宝圓印塔	一石五輪印塔 組合せ宝圓印塔	一石五輪印塔 組合せ宝圓印塔	一石五輪印塔 組合せ宝圓印塔	一石五輪印塔 組合せ宝圓印塔	種別
(29.0)	(42.0)	(25.5)	不明	(62.5)	(35.0)	55.0	(60.0)	(49.0)	(70.0)	(57.5)	(68.5)	(22.5)	全高
15.0	19.0	12.5	27.5	26.0	27.0	14.5	24.0	20.5	27.5	20.0	26.0	13.0	最大幅
妙法	妙法	六月廿日 ○〇冥	宝永元申				口月十六日〇尼	「蓮華經」					銘文
相輪	相輪	水地輪	不明 2分割のため 欠損	相輪欠損			相輪欠損	相輪欠損	相輪	相輪欠損	相輪	相輪	備考
		1704											西曆

							15	11	12		17	12	掲回番号
							74	14	24		95	35	報告番号
L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	地點
32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	調査№
尖頂方形基標 組合せ宝圓印塔	尖頂方形基標 組合せ宝圓印塔	一石宝圓印塔 組合せ宝圓印塔	一石宝圓印塔 組合せ宝圓印塔	一石宝圓印塔 組合せ宝圓印塔	一石宝圓印塔 組合せ宝圓印塔	種別							
(25.0)	(27.0)	(18.5)	(32.5)	(27.0)	(18.0)	(38.5)	(25.0)	(71.0)	(62.0)	(54.0)	20.0	(62.5)	全高
(13.0)	(15.0)	18.0	15.5	16.0	12.5	16.0	13.5	24.0	23.0	22.0	31.5	26.0	最大幅
				妙法			六月十五日 〇尼	「蓮華經」	元禄二巳 貞享丁未 六月三日〇〇	蓮華經〇〇〇〇〇尼	蓮	「」経「」	銘文
接合不可 と同 個体か し31	接合不可 と同 個体か し32	接合下部	相輪	相輪	相輪下部	相輪	水地輪	相輪上部	相輪欠損	相輪欠損	笠	相輪欠損	備考
										1689	1687		西曆

20	17	14			12	11		15	13	12	11		掲回番号
121	97	48			31	18		67	45	33	15		報告番号
J	J	J	J	J	J	J	J	J	J	J	J	J	地點
18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	調査№
地蔵	組合せ宝篋印塔	一石五輪塔	無縫塔	無縫塔	一石宝篋印塔	無縫塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石宝篋印塔	一石五輪塔	一石宝篋印塔	一石五輪塔	種別
(45.0)	21.5	76.0			(70.5)	(67.0)		(37.5)	68.0	(56.0)	(71.5)	(41.0)	全高
30.0	32.0	20.0			24.0	28.0		15.0	26.0	24.0	26.0	27.5	最大幅
					為〇〇〇〇拂定尼	薄□	□□□	經□□	「薄草經妙」 十一月四日				銘文
後 蓋	後 背 型 レリーフ 地	つ。軒上の設 置部の持 段		笠	あり	身に常に身に の通り込み			相輪上部欠損	相輪欠損	相輪欠損	相輪上部と基盤 欠損	備考
													西曆

15	12		13	15			18	14		15	16	17	掲回番号	
70	32		38	63			108	54		66	87	107	報告番号	
L	L	L	L	L	L	K	K	K	K	J	J	J	地點	
6	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	20	19	調査№	
一 石 五 輪 塔	一 石 宝 篋 印 塔	一 石 宝 篋 印 塔	一 石 宝 篋 印 塔	一 石 五 輪 塔	一 石 宝 篋 印 塔	組合せ宝篋印塔	一 石 五 輪 塔	一 石 五 輪 塔	一 石 五 輪 塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	種別	
(32.5)	(61.0)	(45.5)	(56.0)	(30.0)	(60.0)	(31.0)	39.0	73.0	71.0	(40.0)	38.0	33.0	全高	
12.0	24.5	19.0	23.5	14.0	25.0	17.0	40.0	21.0	20.5	16.0	52.0	40.0	最大幅	
〔 「 薄草経 〇〇〇〇〇〇 」 五口 〕	九月廿四日 元祐十一年 院〇〇〇〇〇〇 畫	妙法 ○〇	□□五年未 力 五月廿七日 天正拾五年丁 寅 十一月七日 主敬白	○ 小口口2層 為〇〇蓋子									銘文	
空風輪欠損	相輪欠損	相輪のみ	相輪欠損	水・地輪欠損	相輪欠損	相輪のみ	基盤の三面に地蔵 のレリーフあり。 一面のみ実測			大型の豆			備考	
				1702				1587						西曆

17	17	21		16		13	13	12	12	16	12	15	掲回番号	
91	94	128		84		44	39	28	25	79	29	75	報告番号	
G	G	G	G	G	G	G	G	G	G	G	G	G	地點	
19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	調査№	
組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	石殿	一石三輪印塔	組合せ宝篋印塔	一石三輪印塔	一石三輪印塔	一石三輪印塔	一石三輪印塔	組合せ宝篋印塔	一石三輪印塔	一石五輪塔	種別		
23.0	23.0	26.0	(71.0)	48.0	(65.0)	(66.0)	(44.0)	(63.0)	(67.0)	(60.5)	(66.0)	(26.0)	全高	
33.0	34.0	(36.0)	24.5	18.0	26.0	28.5	18.0	27.0	23.0	20.0	24.5	13.5	最大幅	
													元和五乙未 十月廿三日 口真口 蓬華經 ○○庚〇 四月十七日	
笠	笠	屋根	相輪上部欠損	相輪	相輪	相輪上部欠損	相輪上部欠損	相輪上部欠損	相輪欠損	相輪欠損	相輪のみ	相輪欠損	空風火輪欠損	銘文
													1664 1619 西暦	備考

11	14	14		11	10								掲回番号							
16	51	50		13	2								報告番号							
J	J	J	J	J	I	H	H	H	H	H	H	H	地點							
5	4	3	2	1	1	5	4	3	2	1			調査№							
一石宝篋印塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	円頂方型墓標	円頂方型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	種別							
(67.5)	65.0	80.0	(39.0)	(78.0)	96.0		49.0	31.0	35.5	41.8			全高							
(25.0)	17.5	20.0	19.0	26.5	28.5		29.0	19.0	18.4	21.3			最大幅							
		妙法蓮				左圖 右圖 文政六(己卯) 三月廿七日 庚午ヲセキ立之	正圖 右圖 文政六(己卯) 三月廿七日 松木部立之	正圖 左圖 文政十二年正月一日 丙子日廿七日 清五良叟 嘉次良立之	正圖 左圖 寛政十二年庚申 丙子日廿七日 松木部立之	正圖 左圖 文政十二年正月一日 丙子日廿七日 清五良叟 嘉次良立之	銘文									
相輪欠損				相輪のみ									備考							
							1809	1801	1800		1794～1816		西暦							

16	16	17	14	15	14	15	14		15	16	17	掲回番号
89	88	102	58	64	61	68	61		62	83	106	報告番号
F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	地點
38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	調査№
組合せ宝鏡印塔	組合せ宝鏡印塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	組合せ宝鏡印塔	組合せ宝鏡印塔	種別	
21.0	250	24.5	49.5	(61.5)		(34.0)	51.0	(32.5)	(41.0)	(33.0)	(49.5)	全高
36.0	420	23.5	14.0	19.5		13.0	14.0	23.5	17.5	15.0	17.0	最大幅
大歎恩之施者也 為〇〇〇〇釋迦尼			三月九日 正徳四 庚午 卯 ○〇〇	三月二日 寅 正徳四 庚午 卯 ○〇〇	萬葉四丁卯 慶長十三戊申	元〇〇〇〇 佛 ○〇普提也 口口九日	妙法蓮			妙法	妙法	銘文
莖	莖	基盤		空腹欠損	F水地輪部分 F水地輪部分	空腹欠損	F空風火輪部分 F空風火輪部分	苔身のみ	地輪欠損	相輪	相輪	塔身と基盤が 一石
				1627	1608	1714						西暦

12	13	12	12	11	10	21	21	21	21	17	17	掲回番号
21	40	30	27	20	1	125	126	123	127	92	90	報告番号
G	G	G	G	G	F	F	F	F	F	F	F	地點
6	5	4	3	2	1	44	43	42	41	40	39	調査№
一石宝鏡印塔	一石宝鏡印塔	一石宝鏡印塔	一石宝鏡印塔	一石宝鏡印塔	台座	石殿	台座	石殿	組合せ宝鏡印塔	組合せ宝鏡印塔	種別	
(67.0)	(39.5)	(60.0)	(59.0)	(67.5)	99.0	67.0	18.0	56.0	52.0	19.0	25.0	全高
27.0	21.0	20.0	21.0	21.0	28.0	71.0	(37.5)	55.0	52.0	31.0	36.0	最大幅
法蓮口経 〇〇畫位 二月十五日				元和五年七月 口〇〇〇〇釋迦尼	元和六年八月十三 收白 ○〇〇〇〇釋迦尼							銘文
相輪欠損	相輪欠損	相輪欠損	相輪欠損	相輪上部欠損		「コ」の字形のは それが入り込まれて いる	屋根	屋根	莖	莖	備考	
					15m 中央に認 めらる。							西暦
				1619	1620							

16	14	13	10	16	14		10	14	17	10	10	掲回番号
81	47	42	4	80	56		9	52	100	5	10	報告番号
F	F	F	F	F	F		F	F	F	F	F	地點
12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	調査№
組合せ宝篋印塔	一石五輪塔	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	一石五輪塔	一石宝篋印塔	一石五輪塔	組合せ宝篋印塔	一石五輪塔	一石宝篋印塔	種別	
49.0	(76.0)	(71.0)	76.5	55.5	61.5	(340)	(97.0)	68.0	(240)	77.5	79.5	全高
18.0	19.0	24.0	20.0	20.0	18.0	15.0	27.0	15.0	25.5	20.0	18.5	最大幅
			干時寶永 桃西六日 立 五日	為〇〇〇〇〇 ○○○○定白	為〇〇〇〇〇 ○○○○念一也	久留妻阿 長三口念一也	正月 入於冥 口時鬼口辛未 二月廿九日	從冥入於冥 千時鬼口辛未	空函火水地口	空函火水地口	為「 清淨法身 佛」 (下空)	銘文
相輪	空函頂部欠損	い 基礎が正方形に近 天正の慶長の頃か 笠の下に請花文様か 相輪欠け		相輪	相輪	相輪		梵字状の縮り込み	塔身			備考
			1633	1598		1719	1631					西暦

16	15	13	11	14	10	15	14	11	10	10	10	掲回番号
86	69	41	12	49	7	65	60	17	8	8	3	報告番号
F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	F	地點
25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	調査№
組合せ宝篋印塔	一石五輪塔	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	一石五輪塔	一石宝篋印塔	一石五輪塔	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	種別
(64.5)	(32.0)	(45.0)	(56.5)	(69.0)	(107.0)	(55.0)	(49.0)	(71.5)		96.0	77.0	(73.5) 全高
27.0	12.0	18.0	25.0	19.0	26.0	24.0	13.0	30.0		28.0	25.0	最大幅
	法華華経 七月廿一日	華経 一 〇口蓋 一月十八日	妙法蓮華 寛永元年年半子	妙法蓮華経 明和四 六月七日 經二日	玄蕃院 元和六申 〇月〇〇庚 三月七日 〇〇〇〇庚 七月八日 〇〇〇〇〇〇居士							銘文
相輪から笠が一石	空函頂部欠損	い 表面の大損 基礎欠損	基礎欠損	空函頂部欠損	空函頂部欠損	空函頂部欠損	相輪から基礎	塔身から接合	F 相輪から接合	相輪から笠まで	相輪上部欠損	備考
		1624		1624		1658	1620					西暦

	17	11			19			20			掲回番号
	99	11			114			116			報告番号
C	C	C	C	C	B	B	B	B	B	B	地點
5	4	3	2	1	92	91	90	89	88	87	調査№
一石宝鏡印塔 組合せ宝鏡印塔	一石宝鏡印塔	一石宝鏡印塔	地蔵の台座	位牌型墓標	円頂方柱型墓標	一石宝鏡印塔	地蔵	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	種別
(57.5)	21.0	(97.5)	(30.0)	19.0	(22.5)	19.0	(16.0)	33.0	31.0	31.0	全高
20.0	32.0	(26.5)	25.0	23.0	21.0	25.0	7.5	21.0	19.0	19.0	最大幅
				左面 正面 右面 王安永七成 八月廿五日 ○運兵衛要 ライス事	左面 正面 右面 王七月七日 ○文化二年 八月廿五日 ○運兵衛要 ライス事	左面 正面 右面 王十月十七日 享保十九年 十一月五日 ○成 宿名市三郎	左面 正面 右面 享保十九年 十一月五日 ○成 宿主五月十九日 五天	左面 正面 右面 享保十九年 十一月五日 ○成 宿主五月十九日 五天	左面 正面 右面 享保十九年 十一月五日 ○成 宿主五月十九日 五天	左面 正面 右面 享保十九年 十一月五日 ○成 宿主五月十九日 五天	銘文
相輪欠損	笠		笠・搭身				相輪上部のみ				備考
				1805		1778			1762	1734	1817
											西暦

12	17	21	21		20	20		20			掲回番号
26	98	129	124		119	122		118			報告番号
E	E	D	D	D	D	D	D	D	D	C	地點
2	1	8	7	6	5	4	3	2	1	6	調査№
一石宝鏡印塔 組合せ宝鏡印塔	石殿	台座	地蔵	地蔵の台座	円頂方柱型墓標	地蔵	円頂方柱型墓標	地蔵	円頂方柱型墓標	一石宝鏡印塔	種別
(60.0)	20.5	35.0	32.0	46.1	35.0	142	49.0	(25.0)	34.0	(42.0)	全高
22.5	30.0	45.0	32.0	21.0	24.0		20.5	23.5	18.5	15.0	最大幅
意施王體白 實水口年 來身(豆)	正面 左面 右面 主 吉之口		左面 正面 右面 主 吉之口 ○久三良作	銘文							
相輪欠損	笠	屋根									相輪欠損
				1755		1811	1777		1813		西暦

		15							20	17	16	19	挿回番号	
		71							117	101	77	109	報告番号	
B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	地點	
74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	63	調査No.	
一石 三箇印塔	一石 三箇印塔	一石 五輪塔	円頂方 形型墓標	地藏の台座	円頂方 形型墓標	円頂方 形型墓標	円頂方 形型墓標	地藏	組合せ せ玉鏡印塔	変形墓標			種別	
(540)	(265)	(340)	250	180	370	31.0	58.0	(240)	30.5	1000	(1020)	1000	全高	
17.0	145	120	260	240	260	16.0	23.0	22.0	30.0	28.0	40.0	28.0	最大幅	
妙法									奉供養石塔一基 為〇〇〇〇海定門 干時天正〇〇年八月 奉供養石塔一基 為〇〇〇〇海定門 干時天正〇〇年八月 孝子敬白	南無妙法蓮華經				銘文
														備考
		相輪上部のみ	慶長か享保											西曆
						1765		1774						

										19		挿回番号		
										113		報告番号		
B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	地點	
85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	75	75	調査No.	
円頂方 形型墓標	円頂方 形型墓標	円頂方 柱型墓標	円頂方 形型墓標	円頂方 柱型墓標	円頂方 柱型墓標	円頂方 柱型墓標	円頂方 柱型墓標	円頂方 柱型墓標	円頂方 柱型墓標	円頂方 形型墓標	円頂方 形型墓標	円頂方 形型墓標	種別	
41.0	41.0	31.0	31.0	32.0	33.5	34.0	58.0	30.0	(83.0)	76.0	76.0	76.0	全高	
20.0	20.0	18.0	17.5	19.0	19.0	19.0	21.5	19.0	28.0	22.0	22.0	22.0	最大幅	
左側 右側 佐保								正面 右側 左側 右側 佐保	正面 右側 左側 右側 佐保	正面 右側 左側 右側 佐保	正面 右側 左側 右側 佐保	正面 右側 左側 右側 佐保	正面 右側 左側 右側 佐保	
													銘文	
														備考
1829	1817	1800	1815	1803	1780	1809	1839	1771		1750	1750	1750	西曆	

											挿回番号
											報告番号
B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	地點	
51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	調査№	
円頂方柱型墓標	無縫塔	一石宝篋印塔	円頂方柱型墓標	位牌型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	種別	
39.0	58.0	(56.5)	54.0	(58.5)	47.0	47.5	50.0	18.5	46.2	全高	
18.5	20.0	22.5	23.0	36.0	21.0	23.0	22.0	21.7	20.7	最大幅	
左面(正面)光明天院 右面(裏面)妙法安永四〇年秋 十一月廿一日	正面(正) 十口八〇	正面(裏) 七月廿四日	正面(正) 大徳五年七月 ○○○○○○	正面(裏) 一 ^{〔〕} 日 士	正面(正) 安永二年巳 月廿六日	正面(裏) 宗天保十二年六月廿三日 ○○次平 ^{〔〕} 同善信吉立之	正面(正) 积〇〇董子 三月三日	正面(正) 〇〇倍士 六月九日 〇〇作右工門毎 天保十二年六月廿三日	正面(正) 妙法〇〇〇〇信女 文化十二年九月 廿二日 一 ^{〔〕} 日 士十二年九月 廿二日 一 ^{〔〕} 日 倍名ヲキス 主名〇〇〇〇 ○○○○	銘文	
	相輪上部欠損									備考	
1775			1834		1814	1815~1816	1773		1835~1841	西暦	

											挿回番号
											報告番号
B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	地點	
62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	調査№	
円頂方柱型墓標	自然石墓標	円頂方柱型墓標	無縫塔	一石宝篋印塔	地蔵	地蔵	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	種別	
56.0	71.5	52.0	36.0	40.0	(50.5)	(58.0)	35.0	(44.0)	55.0	全高	
23.0	29.0	21.5	13.0	15.0	(21.5)	18.0	17.0	36.0	12.0	最大幅	
左面(正面) 日興淨庵 子第 九 年	右面(裏) 妙法文化九年 十月四日	正面(正) 十五世僧那院 大徳九年 九月四日	正面(裏) 十六世大中院 文化十一庚午 一月八日卒	正面(正) 妙法〇〇〇〇法師 元禄五年九月 廿五日	九月廿四日 運華社 ^{〔〕} 〇〇〇〇 〇〇〇〇	正月八 九月七日 運華社 ^{〔〕} 〇〇〇〇 〇〇〇〇	正月〇〇董子 十二年六月 廿日	正月〇〇董子 十二年六月 廿日 延享三年 正月廿一日 ○○倍士 元禄元年十一月 十一日 延享三年 正月廿一日 柳門 ^{〔〕} 信尼	右面(正) 一月十一日 左面(裏) 宝慶十四口天 延享三年正月 廿一日 右面(裏) 延享三年正月 廿一日 左面(正) 延享三年正月 廿一日 右面(裏) 延享三年正月 廿一日 左面(正) 延享三年正月 廿一日	銘文	
	相輪上部欠損									備考	
1812	1814	1838	1833		1702	1695	1786	1743	1741~1746	西暦	

			14												捲回番号
			53												報告番号
B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	地點	
30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19				調査№
円頂方形容型墓標	円頂方形容型墓標	一石五輪塔	円頂方形容型墓標	円頂方形容型墓標	円頂方形容型墓標	円頂方形容型墓標	円頂方柱形容型墓標	種別							
41.4	51.7	50.4	630	328	33.4	50.2	32.5	51.2	39.5	36.8	45.9	199	199	全高	
18.6	23.3	21.3	370	17.0	17.9	19.8	16.5	22.9	21.4	18.2	18.2			最大幅	
左側 正面 俗名 姓名 姓松 右側 天保九 年六月 六日 立之	右側 正面 妙法○ 文政元 年七 事 ○作右 門立 之	左側 正面 寶永四 年九 月十八 日 立之	右側 正面 妙法○ 天保二 年九 月七 日 立之	左側 正面 ○文政十二 年正月廿 四日 立之	右側 正面 ○文政十二 年正月廿 四日 立之	正面 ○文政十二 年正月廿 四日 立之									
1838	1818	1792	1709	1830	1829	1803	1830	1832	1797	1825	1837	西暦		備考	

															捲回番号
															報告番号
B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	地點
41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31					調査№
円頂方柱形容型墓標	円頂方柱形容型墓標	円頂方柱形容型墓標	円頂方柱形容型墓標	円頂方柱形容型墓標	円頂方柱形容型墓標	円頂方柱形容型墓標	円頂方柱形容型墓標	円頂方柱形容型墓標	円頂方柱形容型墓標	円頂方柱形容型墓標	円頂方柱形容型墓標	円頂方柱形容型墓標	円頂方柱形容型墓標	種別	
32.0	15.9	38.5	36.8	34.5	51.2	34.5	37.2	55.5	34.5	50.7	17.5	21.0	18.7	全高	
17.5	21.0	19.5	18.1	18.3	22.0	18.3	19.8	21.0	18.7	21.3				最大幅	
左側 正面 政告	右側 正面 八月十四 日 文政八 年八月 六日	左側 正面 妙法○ 文政八 年八月 六日 立之	右側 正面 安政二 年九 月廿六 日 立之	左側 正面 ○文政六 年九月廿 五日 立之	右側 正面 ○文政六 年九月廿 六日 立之	左側 正面 ○文政六 年九月廿 六日 立之	右側 正面 ○文政六 年九月廿 六日 立之	左側 正面 ○文政六 年九月廿 六日 立之	右側 正面 ○文政六 年九月廿 六日 立之	左側 正面 ○文政六 年九月廿 六日 立之	右側 正面 ○文政六 年九月廿 六日 立之	左側 正面 ○文政六 年九月廿 六日 立之	右側 正面 ○文政六 年九月廿 六日 立之	正面 ○文政六 年九月廿 六日 立之	
1825	1770	1823	1823	1821	1840	1769		1807	1752	1752				西暦	備考

第一表 龍源寺間歩上墓地の石造物一覽表

								14	15	持回番号	
B	B	B	B	B	B	B	B	55	72	報告番号	
8	7	6	5	4	3	2	1		A	地點	
円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	種別	
33.5	54.2	38.5	32.0	30.5	29.3	40.0	(62.0)	(40.0)	全高		
18.3	21.3	17.3	18.3	15.3	19.7	19.7	21.0	19.5	最大幅		
左面 正面 右面 裏面 右側 行年 五十九	右面 正面 裏面 ○久文久三年 十二月十七日 八月廿四日	右面 正面 裏面 ○寛政元年己酉 正月廿三日	右面 正面 裏面 ○嘉慶四年己酉 正月十八日 嘉次良立之	右面 正面 裏面 ○明五年己酉 正月廿三日	右面 正面 裏面 ○嘉慶四年己酉 正月廿三日	右面 正面 裏面 ○嘉慶四年己酉 正月廿三日	右面 正面 裏面 ○天保八年己酉 六月五日	右面 正面 裏面 ○天保九年己酉 七月廿日	妙法〇信女 ○吉太立之 ○久子	妙法〇禪尼 ○吉太立之 ○久子	碑記提也
1863	1789	1785					1837	1591		銘文	
										備考	

										持回番号
B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	報告番号
18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	地點
円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	円頂方柱型墓標	種別
39.3	41.4	45.5	35.5	55.0	39.1	50.9	54.5	33.7	34.0	全高
18.0	19.6	19.5	18.7	22.5	21.9	21.9	20.9	18.4	19.3	最大幅
左面 正面 右面 裏面 左側 行年	右面 正面 裏面 ○寛政元年己酉 正月廿三日 庚午	右面 正面 裏面 ○嘉慶四年己酉 正月廿三日 庚午	銘文							
【九月二日】 〔一〕 〔一〕 〔一〕	〔一〕 〔一〕 〔一〕 〔一〕 〔一〕 〔一〕	備考								
1815	1854	1809	1776	1825	1813	1797	1863	1744	西	曆

報告書抄録

ふりがな	いわみぎんざんいせきせきぞうぶつちょうさほうこくしょ		
書名	石見銀山遺跡石造物調査報告書		
副書名	杣畠谷地区 龍源寺間歩上墓地・妙像寺墓地		
卷次			
シリーズ名	石見銀山遺跡石造物調査報告書		
シリーズ番号	19		
編執筆者	今岡一三・伊藤徳広		
編集機関	島根県教育委員会・大田市教育委員会		
所在地	〒690-8502 島根県松江市殿町1番地 TEL0852-22-5642 〒694-0064 島根県大田市大田町大田口1111番地 TEL0854-82-1600		
発行機関	島根県教育委員会		
発行年月	2020年3月		
調査原因	石見銀山遺跡総合調査		
名称	所在地	主な時代	石造物
龍源寺間歩上墓地	大田市大森町	安土桃山時代 ～ 江戸時代後期	一石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔、無縫塔、位牌形墓標、円頂方形墓標、円頂方柱墓標、地蔵、石殿、用途不明石材
妙像寺墓地	大田市大森町	安土桃山時代 ～ 江戸時代後期	組合せ五輪塔、円頂方形墓標

石見銀山遺跡石造物調査報告書19

— 榛谷地区 龍源寺間歩上墓地・妙像寺墓地 —

令和2(2020)年3月

編 集 島根県教育委員会／大田市教育委員会
松江市殿町1番地／大田市大田町大田口1111番地

発 行 島根県教育委員会
松江市殿町1番地

U R L http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/iwami_ginzan/
印 刷 有限会社 松陽印刷所
